
三雲学園物語

王蠱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三雲学園物語

【コード】

N6708W

【作者名】

王蠱

【あらすじ】

三雲岳斗作品キャラの集まる「三雲学園」。
そのありふれた、だからこそ騒がしい日常。

初夏のミスギワ（前書き）

まずは投稿済みの分を再収録していきます。

初夏のミスギワ

「暑い・・・」

積極的な初夏の太陽にじりじりと照らされ上昇を続ける体感気温に思わず呟いてからハッと気付いて、

樋口琢磨は慌てたように自分の口元を両手で覆った。

彼がしゃがみ込んでいるのは屋外プールのすぐ脇の茂みの中。

持てる力の全てで気配を隠す彼から十メートルも離れない場所では手狭な更衣室の中、

体育の授業に参加する女子生徒たちの着替えが進行しているはずだった。

時折ここまで漏れ聞こえてくる少女たちの笑い声に樋口は本能的に反応しかけ、

だがそれをなんとか鉄の理性で押えこむとまた腰を落ち着ける。

彼がこの場に待機し始めてからの十数分、ずっとこんな感じが続いていた。

（落ち着け・・・落ち着くんだ俺。今ここではれたら全部台無しになっただうえに大損害だ・・・！）

オスの本能のままに飛び出そうとする体は小刻みに震え、必死に御する樋口の顔を

気温のせいだけではない嫌な汗が滝のように流れ落ちていく。

ポトリ、と地面に落ちた一滴が砂を刹那黒く染め、次の瞬間には蒸発し元の色を取り戻す。

目の前に揺れる空の色を映す長方形の水の光景も、

今の彼には目の前に晒されど絶対に掴めない、悪趣味な拷問の道具のように見えていた。

(授業の開始まであと2分・・・なんとか持ちこたえられるか・・・！?)

腕にはめた時計の文字盤を見やり、彼は時の歩みの遅さに絶望しそうになりかけ

だがなんとか踏みとどまった。

『あれー？そういえば今気付いたけど人足りなくない？』

『え？あー言われてみれば六夏とシューラちゃんどこにいったんだろ。』

さっきまで教室には絶対いたんだけどなあ』

流れてきたそんなたわいないガールズトークに、しかし今の樋口は何故かニヤリ・・・と

暗い笑みを我知らず浮かべる。彼の邪心まみれの内心を代弁でもするように、

彼の手中でデジカメのレンズがキラリと輝いた。

今頃彼が部長を務める『写真部』の部室では今話題に上がった高等部3年の倉澤六夏、

それに2年の黒崎朱理と1年の天乃羽々姫が可憐な水着姿をカメラの前に存分に晒している頃だろう。

撮影者はシューラ・イルマリア。写真部唯一の女性部員

(というか、実のところ写真部はこの二人だけで活動中)が大活躍中のはずのその場の光景を

脳の片隅で妄想などしてみつつ、彼はあくまで冷静に目の前のハンディング撮影に全神経を集中させる。絶賛部費枯渇中の写真部にとって

この全学年合同のプール授業、というイベントは

まさに百年の不況の真っ最中に徳川埋蔵金が発見されたぐらいの僥倖と呼ぶにふさわしいものだった。

機材の修理や各種消耗品など結構な頻度で資金面の問題が発生する

この学園の写真部では

例年の如く『ある種の写真』が売りに出される。ほとんどの男子生徒と一部の女子生徒、

ついでに教師陣まで顧客とするほどの魅力と魔力を秘めた代物
女子生徒たちの生写真である。

(変態という名の)紳士的な精神の持ち主だったらしい初代部長が
掲げた

『盗撮など不埒な真似は絶対にしない、やるからには正々同堂全力
で』というモットーを受け継ぐ

彼らの写真撮影のルールはちよつとばかり特殊で、隠し取りなどせず
女性に事情がバレている上で恥ずかしい写真を撮らせてもらう、と
いうもはや

犯罪なのかただのアホなのか判別付ける要素もないものだったりす
る。

ちなみに今年に関してはまず何人かの人気女子に事前に『写真とら
せて売りさばかせてください!』と

部長が直談判、ほとんどの面子に断られたもののこの手のイベント
には積極的な朱湊、

そして六夏と羽々姫も『ギャラを払ってくれるなら』とモデルにな
ることを許可してくれた。

押し並べて女子のレベルの高いこの学園の中でも上位に位置するだ
ろう3人の参加は心強い。

だが、やはり現実的に商売として考えるならもう少しだけ顧客のニ
ーズに対応できるよう

モデルの幅を広げたいところだ。そこで今年の部長様も例年の部員
達に倣い、

こうして水着少女たちの出陣を今か今かと草葉の陰から待ち構えて
いるのだった。

(あと1分きったか・・・)

アナログ時計の秒針が最後の周に入り、樋口は心の中でカウントダウンを開始する。

もうとつくに着替え終わった生徒達はプールサイドに整列し、思い思いに今からの納涼の一時へ心を向けているのだろう。

(45、44、43・・・)

プールサイドに充満する騒がしい程の歓声。

(30、29、28・・・)

風に乗って木陰まで届く、微かな水の飛沫。

(10、9、8、

『ガシッ』

7、・・・?)

不意に何か威圧感のようなものを背後に感じ、彼はカウントダウンを中断し何気なく後ろを振り返った。そこには

「何しようとしてんだ、お前?」「

鬼が立っていた。しかも3人。

「と、智春トモに古城!?それにハル先生まで!

ど、どうしたんだよこんな時間にこんな場所で・・・」

右肩を夏目智春、左肩を暁古城という同級生ズにがちりホールドされ、

おまけにすぐ目の前にはどう考えても教職者には絶対に不要な長杖

を構えた

体育のハル・カムホート先生まで。問われてもだが何も言わないまま、

三者の眼光は一直線に樋口の手元へと注がれる。そこにあるのは・
・
彼がこれから使おうとしていた商売道具、デジカメ。

「聞いたぞ、樋口・・・」
最初に口を開いたのは智春。いつもの彼らしからぬ低い声音で紡がれる言葉に

樋口は冥府の光景を幻視したような気がした。

「お前・・・嵩月と操緒の水着写真撮ろうとしたんだってなあ・・・
?しかも盗撮まがいの方法で？」

「ちょ、ちよつと待てトモ。それは誤解というかうちの部の伝統と
いうか・・・」

「姫柎と浅葱にも頼み込んだって聞いたが・・・だったら容赦する
必要はないな」

言う間に古城の全身から爆発的に噴き出すのは不可視でありながら
凶悪なまでの圧力の気配

世界最強レベルの吸血鬼“第四真祖”の膨大な魔力。

刹那の内に右腕へと集約したそれはバチバチと鋭く迸る紫電へとそ
の性質を変え、

手首の先に雷の剣を形作る。

「古城さぁー！ーんんんん！?!その見るからに危なっかしいもん
はなんですか一体!?!」

余りに絶対的な目の前の恐怖。必死に最低限の正気だけは失うまいと
無意識に声のボリュームを増す樋口に、古城は小さく黒い笑みを浮
かべ

「OGの華島さんに教えてもらってな。ほら、あの人雷系統の能力だろ？」

俺も毎度毎度騒ぎが起こるたびに

“獅子の黄金”^{ヒケルス、アウルム} 呼び出してちゃ色々ともたないからな」

古城の血に宿る第五の眷獣 雷の巨獅子“獅子の黄金”。

一度暴走すれば大規模自然災害に匹敵するほどの破壊力を見せつけるような危険極まりない存在を

事あるごとに出し入れしては、確かに様々な方面に尋常ならざる被害がもたらされるのは

火を見るより明らかだ。実際、非公式ながら過去には五百億円規模の損害をもたらしたことがある

この眷獣の取り扱いに古城が慎重になるのは当然のことであった。

「ちょうど実戦で使って見てもいいころかなって思ってたんだ。

それで夏目かハル先生に試合形式で手合わせしてもらおうかと思ってたら・・・」

「水無神や嵩月、それに姫終に藍羽が丁度グラウンドに来てな。

『写真部に水着写真を撮られそうになった』と訴えられたのでこうして止めに来たわけだ」

古城の話を継いで言い終わったハルは常の気難しそうな表情にさらに皺を刻み、

付いてきた生徒二人の様子を見やる。

「・・・もつともこの二人の中ではもう貴様は処刑対象になってしまっているようだがな、樋口琢磨？」

やれやれ、といったように少しばかり肩をすくませるハルの声ももはや樋口には届かない。

精神防御にもそろそろ限界が近づいているらしい彼は唇の端から泡を吹きかけ、緊張で焦点は宙をさまようことしかできない。

「さて夏目に暁・・・もう一度聞くが本当にやるつもりか？」

「勿論です」

「人の女に手を出そうとした報いはちゃんと受けてもらわないと」

二人とももう完全に戦闘・・・というかもはやただのリンチ用思考の切り替えは完了していた。

仮にも智春は幼馴染と彼女を、古城も仲の良い女子二人を変態写真部のファインダーという

毒牙に掛けられそうになったのだ。その怒りはちょっとやそつとで治まりそうもない。

「そうか・・・ならここは任せる。しつかり保健室に運んで置けよ」
「いっそ無慈悲なまでに言い放つとハルは振り向き、今来た方向へと戻っていった。

ちなみにだが彼も相棒のフランから「写真が売れたら何かおごつてやるヨ」と

しばらく前に宣言されていたがそのことはすっかり記憶の外だった。さらに言つと写真部に自分を売り込みに行ったフランは

「いや、全身拘束とか流石にマニアック過ぎて売れないと思うから・・・」と一蹴、

しばらくいつもの殷勤無礼さも身をひそめるほど大人しくなったりしていた。

ま、そんな話は置いて。

「来い、クロガネ“？鉄”・・・」

夏の日差しがつくる智春の影、それが一気に色を真の闇のそれへと変えた。

召喚の呪文を呟く彼の声音は酷く穏やかで、まさに嵐の前の静けさという表現こそ

ぴつたりな印象を周囲にばらまく。

「古城、頼む」

「ああ分かつてる」

おもむろに掌を智春の影へと沈ませた古城の腕の先から再び放たれる強烈な魔力。

シユバルツシルトの闇の中へと吸い込まれたそれを吸収し

ウオオオオオオ・・・！！！！！！

慟哭にも似た機械音を轟かせ巨大な影が跳躍するように智春の陰から出現した。

内包した副葬処女の魂ではなく、異質ながらも巨大な第四真祖の魔力を動力に変換した

機巧魔神“？鐵”はその拳に重力の破壊力をみなぎらせ。

「ちゃんと処置はしてもらうから・・・今は安心して悔い改めろ」

言い放った古城が雷電の刃をふるい、魔神が漆黒の重力弾を放つ。

「・・・」

そんな一個人に対してはあまりに過剰過ぎる様な気がしないでもない合体技を、

しかしもはや恐怖からの茫然自失を通り越して虚無となった樋口はただただ受け止めるしかなかった。

この日、樋口が学んだことは「女性に手を出す時は慎重に」だった。

初夏のミスギワ（後書き）

感想・誤字脱字の報告などありましたら
どうかよろしくお願いいたします。

読姫狂想曲（カプリッチオ）

「これは一体どこの馬鹿の仕業なのですか・・・！」

怒りにその小さな肩を震わせる黒衣の少女に、傍らに立つ青年はだが何も言わずただただ肩をすくめて見せるだけだ。

「さつさと答えるのですヒューイ。あの本は今どこのどいつが持つていやがるのですか!？」

「はぁ・・・少し落ち着いてくれないかなダリアン。今は仕事かどうか？」

少女と並んで椅子に腰かけた青年の前にはカウンター。

今日の日付と返却期限を示すカウンタータイプのカレンダーが置かれた

そこを挟んだ向こう側では数人の生徒が訝しむような視線を書架の陰から、

もしくは腰かけたテーブル席から覗かせている。

しかしそんな余人の様子など全く気にしていないように

黒衣の少女　ダリアンは鼻息荒く立ち上がると

「何を的外れなことを言っているのですかこのボケナス!」と常より当社比2割増し程度の勢いで猛然と抗議の叫びをあげる。

「あの本がどれだけ貴重なものかお前は全く理解していません。18世紀の魔術結社の首領がいまわの際に書き遺したとされる『ハドルル手記』・・・」

肉体の再生と魂の定着の秘儀が記録された幻書を・・・」

「・・・ちよっと待ってくれないかダリアン」

そこまで聞いたところで静止を示すように片手を小さく掲げ青年

ヒュー・アンソニー・ディスワードは口の端を呆れをこらえるように歪めた。

「なんで幻書が“この図書館”の蔵書に紛れて貸し出されたんだい？」

相棒の発言の片隅を耳に入れたその刹那にはもうダリアンは顔をあさつての方向へと向け、誤魔化すように下手くそな口笛まで吹いている。

この図書館、とヒューイが言うのは勿論今彼らがいるこの三雲学園の図書館のことである。

教師兼図書館司書のヒューイと図書委員会のダリアンが先程から騒いでいる原因は簡潔に言えば貸し出された図書が期限を過ぎても返却されていない、突き詰めればただそれだけのことだった。

だがつい今しがたのダリアンの行動と発言から鑑みるに、事態はただただ傍観してもいられないような感じで。

「・・・なるほどね。この前の蔵書整理の日、ついでに幻書の虫干しをしていた、と」

「是^{イエス}・・・」
「それで回収し忘れた幻書の内の一冊を、

図書委員の誰かが間違つてこっちの蔵書にしまった、と」

「是^{イエス}・・・」
「それが運悪く誰かに借りられてしまって、しかも今の今までその事実^{イエス}に気付かなかった、と・・・」

うん。根本的には君の過失じゃないかな、ダリアン？」
「と、とにかく今はさっさとあの本の回収に動くのです！」

旗色が悪くなってきた現状から一時でも脱出すべく
話の方向性を無理やり変えようとするダリアン。

人の想像が容易に及ばないほどの遙かな時を生きてきたはずの壺中
天は

頬を膨らませ不貞腐れているような気配。

ヒューイはやれやれと呆れたような苦笑のまま腰を上げると、
近くの棚から数日前の貸出リストを取り出した。

「あああの本か。あれなら確か沙々羅シシラが持っていったな」
「な・・・!？」

科学部の部室たる科学準備室、眠気を堪えるようにコーヒーを流し
込む

アニア・フォルチュナのそんな言葉にダリアンは絶句した。

「随分と古い本だったので気になってな。もしかすれば分離機スプリッターの開
発に

利用できるかもと思って少し読んでみたのだが・・・」

分離機アスラ・マキーナとは機巧魔神に贅として内包された
ペリアルドール
副葬処女を解放するための装置のこと。

機巧魔神の専門家たるアニアが以前から研究しているこの装置は理
論上、

実際に完成したとしても“運喰らいラックイーター”の悪魔の確率制御能力と
魔神相剋者レベルの途方もない魔力が必要となるのだが、

運よくアニア自身がその“運喰らい”であり

しかもこの三雲学園には“第四真祖”の暁古城という
存在自体チートみたいな化け物がいるのでそこらへんはあまり問題
なかった。

つまり現状最大の課題は実物を構成する理論に他ならないわけだが。

「ま、なんてことはないな。所詮は数百年前の“最先端知識”に過
ぎなかったよ」

歴史的資料としての価値ならあるかもしれんが。とアニアが言えた
のはそこまでだった。

「ふ・・・ふぬおおお！！！！」

「ダリアン！？」

大人しく座って話を聞いていたダリアンはとんでもない速さで立ち
上がると

ヒューイの声も完全無視、今まで見たこともないくらいアグレッシ
ブな拳動で

拳を振り上げアニアへと殴りかかろうとする。

流石に暴力沙汰まで起こすのはやり過ぎだ、と必死にヒューイはそ
の胴体を掴み引きとめる。

「ええい離すのですヒューイ！このクソ厄病神に自分の運氣全放出
させて

地獄に送り返してやらねば私の

気は収まらないのです！」

「いいから落ち着けダリ・・・」

「そう言う貴様こそ、その体内の蔵書を全部市立図書館にでも寄贈
してから死んでくれ」

火に油を注ぐのたとえ通り、アニアのその発言に遂にダリアンマジギレ。

「こんの・・・くそチビがあああ！！！」

「お互い様だこの陰気ゴスロリ娘えええ！！！」

シャウトし掴み合いの大乱闘に移行する二人の少女。

同族嫌悪ってやつかな。などともう仲裁を諦め傍観を決め込んだヒューイは

勝手に注いだコーヒーを飲むついでに無言で眺めていた。

「ここで本当に最後、なのでしょね？」

ジト目で睨んでくるダリアンの視線をスルーしてヒューイが見やるのは

男子学生寮から少し離れた所に位置する小さな公園

正確にはそこで無駄に存在感を自己主張している黒く巨大な立方体。

「？、^{かがやき}とか言ったかな。こんなもの建てて住んでるなんて、

もしかしたら変わり者なのかな？」

「この学園の関係者で変わり者でない人間を探す方が難しいのです」「それもそうか」

アニアから沙々羅^{ウツク}に渡ったという幻書を追って科学部からシュラウド部に行った二人だったが、そこで聞いた返事は

「あ、悪い。又貸ししちまったよ、あの変な本」というダリアンにとっては

死刑宣告にも近い内容だった。

その後ラクロス部のジェシカ、保険医のミスリル先生、
校庭で無許可のかき氷屋をやっていた鳳島蹴策、そこで

練乳の代金をまけると食ってかかるルードルフ・オイスタツハ・・・
と

某受難な屋敷妖精並みにリレーされていく『ハドラル手記』。

必死に追いかける二人が最後にたどりついたのがこの目の前の厚切
リモノリスの家主、

科学部部长こと？塔貴也かかやまきやだった。

「さて、じゃあ早速だけどお邪魔させてもらお・・・

」「ああああああやめてくださいそれだけは後生ですお願いしま
すううううう！！！！」

う、か、な？」

周囲の木々の枝にとまっていた鳥が一齐に逃げだすくらいの絶叫。
反射的にその声のした方へと視線を向けた二人の目に入ったのは

「カートリッジボード 幻書装填 ブレイズ 起爆！」

」「ぎやああああ俺（僕）たちの秘蔵のお宝があああああ！
！！！！！！」

何故か怒り心頭のご様子で“災厄の杖”で魔力の炎をぶっぱなして
いる

風紀委員所属のハル・カムホート先生だったり。

その後ろで気に荒縄でグルグル巻きにされている？部長と樋口琢磨
だったり。

そして炎に包まれて轟々と燃え始める無数の……エロ本の山だったり。

「先生いくらなんでも殺生な！俺たちが必死に集めた貴稿本が……」

涙ながらに訴える樋口。すぐ横では部長が無言のまま目から血の涙を流している。

しかしハル先生は

「個人的に所有するなら全く構わん。だが授業中にまでこういうものを持ち込んだ罰だ。今後は気を付けるんだな」

そんな。と動けないながらに泣き崩れる馬鹿二人。と、

「あ、ああああアレは……！」

ぶるぶると震え出したかと思つた次の瞬間、なんとも表現しがたい徒労感に

さいなまれていたヒューイの横から黒衣の少女が駆け出した。

向かうのは……天にも昇らんばかりの勢いで燃え盛る紅蓮の中。

「！待て、ダリアン！」

ヒューイは他の全ても忘れ、その小さな手を掴もうと手を伸ばした。

「あの……お二人さん、これは一体どういう種類の冗談でしょうか？」

「そうだね、まあ気楽にコントとでも思ってくれていいよ。マッドサイエンティストの実験室コント」

「あなた本物のソレでしょう！全っ然安心できる要素が見当たりませんよ！」

薄暗い部屋の中央部、昭和特撮チックな手術台の上に鎖で固定されたまま？塔貴也は絶叫する。

動かせない首を必死によじって見える人影は二人分。

医務室勤務でたまに科学系の教科なども教えている白衣の人物、通称“教授”。

そして彼と行動を共にするところがよく目撃されている図書委員のラジエル。

平時から学園生活にはあまり似つかわしくない不穏なオーラを漂わせまくる

二人の手の中にはそれぞれ数本ずつ、色とりどりの怪しい液体で満たされた注射器が。

「図書委員長様からの依頼でね。あなたを人体実験のモルモットにして、と」

「聞いたところどうやら先日“黒の読姫”とその鍵守 失敬、

ダリアン君とヒューイ君が火傷を負った原因は君らしいね？

貴重な幻書をいかがわしい本と一緒にしていた拳句、

誤って焼却されそうになったとかならないとか？」

なんとかギリギリで回収には成功したものの二人は軽い火傷で

現在も治り切っていないという状況。ムカついた図書委員長ことダリアンが部下たるラジエルに頼んだ内容に

興味を持った教授がそれに乗り気になった結果、このような今に至ったようである。

「さて、ではどの薬品から試そうか・・・」
「教授じゃあアレからやりましょうよ。音々ねねが調合したの譲っても
らったやつ」

「ああ爆炎ソフトカプセルか。実は調合内容を私なりにアレンジし
てみてね・・・」

あ、僕今日死ぬんだ。

絶望というゴールしか見えない闇の中へと、

哀れな実験動物の意識は果てなく落ちていくのだった。

温泉へ行こう！

額に浮かんでは流れ落ちる汗が風に触れ冷えるたび、心地よい涼感が全身を突き抜ける。

「水無神ー、ちょっとそこのシャンプー取ってくれ」

『すいませーん。私幽霊なんで触れません持てません運ばませーん』
もうもうと立ち込めているであろう湯気の向こうから聞こえるのは何人もの若い女性の声。

「ったく肝心な時に使えねーな。じゃあ姫柎きりめづでもいいや、こっちに放ってくれ」

もし視界が正常であつたなら。思春期男子だつたら
いやむしる男という生物だつたならほぼ確実に「御馳走さまです！」と

床に頭を叩きつけんばかりの勢いで土下座し
神様に感謝するであろうシュチュエーションがリアルタイムで進行しているその場において。

「シャンプーシャンプー・・・あ、これですね。じゃあ投げますよ？」

おー。と軽く応える声の直後に何かが空を切るような音が木霊し。

カポン！

「あだっ！」

後頭部に直撃した“何か”に智春は間抜けな声を上げた。

「？智春どうかしたか？」

「いや、なんか急に頭に硬い物が・・・」

心配そうに声をかけてくれる友人の顔もかし

しっかりとタオルで目隠しされたこの状態では見やることもできず、智春は痛みを抑えるように被害地点をさすってみる。

「先輩方大丈夫ですか?!」

と、こちらに近づいているらしい水音と少女の声。なぜか心配そうな響きを

多分に含んだその主を察し、智春と友人 暁古城は
とりあえず大まかに検討を付けた方向を向くと「あーだいじょぶだ
いじょぶ」と努めて軽く返す。

だが二人の目の前に立っている(らしい)少女の気配は変わらず、
申し訳なさそうな表情が目隠し越しにでも二人にはありありと想像
できた。

「す、すいません。あの、はつきりとは見えなかつたんですが
頭に当たってましたよね?コブとかになつたりしてませんか?」
偶然とはいえダメージを被ることになってしまった智春はだが怒気
の片鱗も見せず、

むしろ必要以上の加害妄想に陥ってしまっているらしい少女を安心
させるよう軽く笑いかける。

「このくらいなんてことないってば本当に。
そんなことよりえっと・・・ほら、これシャンプーだろ?さっさと
沙々羅先輩に渡してきなよ。

あの人が今日の参加メンバーの中で一番面倒臭いんだから」
「誰の性格が面倒だ。夏目に暁、お前ら帰ったらちよっとうちの部
室来いよ。」

新技の練習がてらケシズミにしてやるから」
「って俺もかよ?!そういうところも面倒臭いんだよアンタは!ち
つたあうちの姫柎を見習えよ」

うちの姫柎、の所でその当人が周囲の温度からでは決していない
とある理由で顔を薄く朱に染めたが、当然今の古城にはそれも見る

こと叶わず。

智春は向こうの方でいつもと変わらずきゅきゅと騒いでいるらしい

幼馴染の声を微かに聞きながら色合いも分からない湯の中へとその身をゆっくり沈めていく。

『温泉旅行？沙々羅先輩の発案で？』

だとさ。と投げやり気味に答えてやって智春は昼休みの時間、偶然通りかかったシユラウド部の部室の前に置かれていた

『TAKE FREE』の用紙を操緒に見えるように机の上に広げた。

「日付けは今度の土曜で日帰り。学校集合したらそこからはバスで1時間くらい移動して、

さらにそこから山道20分くらい歩いて・・・ってここには書いてるな。

ちよっとした秘湯ってやつかな」

『うん、興味はちよっとあるけど・・・なんか面倒くさそう』

「まあ沙々羅先輩だから」

『だよ〜』

この場にはない上級生をさんざんボクソ言いまくる二人。

私の強いところがある操緒と比べてもさらにフリーダム極まりない性格の

あの先輩のやることは正直予想できない。

それは例えば本気出せば世界まるごと非在化の危機に陥らせた機械の神様を

あっさりぶっ壊しやがった魔神相剋者アスフラインだったり、

もしくは丁度同じ印刷物に目を通していた世界最強の吸血鬼様だったり

シックスセンス的な部分で「関わらない方がいいな・・・」と

判断しそうになるくらいのレベルだったわけで。

「ほんと、この学校の上級生でまともな人っているのかな？
いや多分いっぱいいるんだろうけど、
それにしても変人とのエンカウント率とイベント数が多すぎじゃないかな僕ら」

それが原作主人公補正です。あなたのお友達の古城さんも似たようなもんです。と

天の声からの囁きもだが残念ながら聞きとれるほどには
この世界の無茶ぶりには毒され切っておらず、
智春は短く溜息をついて立ち上がるとゴミ箱に向かいかけ、

ガシッ・・・

自分の意思全く無関係にその左手で机の角を掴まされた。

「？操緒どうかした」

見れば智春の左腕に操緒が自分の腕を重ね、そのコントロールを奪っていた。

突然の行動の意味するところが咄嗟には理解できず首を傾げる智春の目の前で

彼女はなぜだかちょっとだけ言いづらそうに顔を俯けて。

『あ、あのさ・・・私ちょっと・・・これやっぱ行きたい、かも・・・』

珍しく言い淀むみたいにそう告げた。

下を向いた彼女の視線が捕らえているのであろうその先に在る印刷

の文字を認め

(ああ・・・)

と残念な子を見るみたいな目で彼は納得。印刷されたプリントの下の方の一段、

先程は気にも留めなかったその一文が彼女の気を引いたのだろう。

曰く、『泉質・・・豊乳効果あり』というその一文が。

ゆったりと記憶の淵から目覚めた智春の肩から下にはいまだ温かい湯の感触。

どうやら温泉のリラックス効果で湯船の中でうたた寝してしまっていたらしい。

軽く苦笑して少し体を動かしてみるとすぐ隣で肌の感触。

「うあ・・・？」とこちらも浅い眠りから覚めるようなどこか抜けた声を上げる。

「・・・ああ智春、起きたのか？」

「そういうお前もつい一瞬前まで寝てたけどな」

目隠しのタオルは外されていないものの声で簡単に隣に並ぶ相手を把握、

二人は互いに軽く笑いあった。

豊乳効果を期待した(射影体なんだから影響ないだろ、という智春の至極当たり前な意見は完全に黙殺された)操緒が

温泉に来るには副葬処女のシステム上

ハンドラー演操者である智春からあまり距離をとることができないので自然彼を伴うことになった。また以外といえれば意外なことに

暁古城と姫柊雪菜の友人以上恋人未満(傍から見ればバカップル)

コンビ、

智春と古城それぞれの妹でこちらも親友同士の苑宮和葉と暁風沙、
さらにどこから噂を聞きつけたのか近所で探偵をしている

乳マニア アダム・マーチバンクスまで加わりそれなりの人数にな
った一行は

主催者である沙々羅にツアーガイドでもされるように案内されるまま
この山深い というか深すぎる温泉まで到着、それぞれ日々の疲
れを癒していた。

ただ自然温泉なので当然のことだが男女の湯船の別などなく混浴と
なってしまうこの温泉、

男性陣はちよつとだけ後ろ髪引かれながら

(マーチバンクスだけはどこかの終末大好きドクターが

人形落とした時なみに錯乱&絶叫しながら)目隠しとしてタオル着
用、

腰の大事なところもちゃんと隠して湯船の隅辺りで縮こまるように、
だがそれなりに楽しんで時間を過ごしていたわけだった。

「・・・なあ、なんかおかしくないか？」

「やつぱりお前もそう思うか」

うたかたの眠りから覚めて数分、少年二人は周囲の様子に違和感を
感じた。

声がしないのだ。一緒にいたはずの女性陣の楽しそうな声が。

まさか全員湯あたりでもしたのか？もしかして俺たち置いて帰っ
ちやっただけ？

突発的に湧きあがった不安に古城はタオルの結び目辺りに軽く手を
伸ばした。

「な、なあ智春・・・もしみんな気絶とかしてたら・・・大変だよなあ？」

「ね、念のため確認でも、し、しといた方がいいかな？」

視覚が使えず、良く分からない状況ながらに二人が導き出した行動論は

『オスとして当然の欲求の正当化』だったりしたわけで。

パサ・・・と二人同時にタオルの結び目に手をかけ、解く。

まだ目は開けていない、念のため。ここでもし女性陣の悲鳴でも聞こえようものなら

二人は全力で謝罪する覚悟までもう出来ていたわけだが、しかし幸か不幸かやはり聞こえてくるのは微かな水音だけ。

見えないながらも呼吸だけでタイミングを合わせ、「せーの・・・」で二人はその眼を開けた。

すぐ目の前に馬鹿でかいクマさんが座っておられました。

「わーお」

「お、やっと始まったか」

温泉から少し離れた所に在る休憩用の山小屋から一人出て、

沙々羅は愉たのしそつに白い蒸気を立ち昇らせる下方の温泉　もつと
言えば

そこで10メートル級のヒグマ相手に必死の形相で戦っている智春と古城を眺めた。

時折り『クマアアアア！！！』とか絶対にリアルなクマはしない
鳴き声で咆哮する黒い怪物に

智春は逃げまくり・回避しまくりの防戦一方、

古城も高圧電流へと変じた魔力の塊を連続で投げつけるが、

クマはとんでもない反応速度と防御力でたたき落としていく。

二人の恐怖に染まった声が木々を揺らす。

「二人とも頑張って倒せよなー！今日の晩飯は熊鍋だかなー！」

地獄絵図と呼んでも遜色ないレベルの惨たらしさを平然と眺めて言
い放ち、

沙々羅は湯上りのフルーツ牛乳をごくごくと豪快にあおった。

「料理人は刃物を使って人を幸せに出来る唯一の仕事」ってどっかのばあちゃん

オチの意味は「ダン書」一巻参照。

知らない人は前半で笑っていただければ幸いですw

「料理人は刃物を使って人を幸せに出来る唯一の仕事」ってどっかのばあちゃん

『料理を習おうと思います！』

「あつ、そつか。がんばれよ」

重大な決心をしたように強く宣言する幼馴染とは対照的な態度で、夏目智春は寸前までと変わらぬ動きで箸を進めていく。

いつもとなんら変わらぬ昼休み、持参の弁当に自販機で買った飲料水を添えた

これまたいつもと変わらぬ昼食にしかし何をそこまで憤慨しているのか操緒は

『聞けよ！』とばかりに智春の片手に憑依、力任せにドン！と机を揺らす。

その音に机を並べていた嵩月やアニア、近くの席のクラスメイト数人が

怪訝な顔を向けてくる。

「痛いなおい・・・なんなんだよ本当にさ」

無理やりコントロールを奪われた拳句ダメージまで喰らわされた右手を擦る智春に、

しかし操緒はなおもお冠といった様子で軽く睨みつけてくる。

『だーかーらー！ちゃんと料理を習ってみようか言ってんの！一回で理解しなさいよ！』

聞き分けのない子供に言い聞かせるみたいに一言一言を強調する喋り方に

少しだけムカつきつつ、とりあえず言われた側の智春もやっとその内容を理解した。

「料理つて・・・え？お前が？嘘だろ、今日はエイプリルフルじやないぞ」

『・・・何、そのあからさまな上にもものすごく腹立つ動揺』
信じられない、と言葉のみならず雰囲気まで併せて物語る少年に
操緒の眉間に不機嫌な皺が小さく刻まれる。

『私が料理覚えちゃいけないわけ？そりゃあ今だって全然できない
わけじゃないけど・・・』

「どの口が言うんだこの天災料理人」

まったく自覚症状のないらしい少女に遂に我慢できなくなったらしく、

智春とステレオでアニアまでもが苦言を訴える。

『え〜やだな〜二人とも天才だなんて〜 照れるな〜』

「天才じゃなくて天災だったの。天の災いの方だから」

有頂天気味にいやんいやんと宙空で身をよじる勘違い野郎に

智春は現実という名の劇薬を叩きこんだ。瞬間、操緒の表情が一気に凍りつく。

「焼けば炭化する煮れば原型なくなるまで崩れる、

蒸せば蒸気で台所が吹っ飛びかけるとか人災以外のなにものでもないからな？」

苦い記憶を再生する智春の表情は暗い。基本的に炊事も自分ですべてこなす彼だったが、

時折気まぐれに調理の名を借りた破壊活動を実行する操緒に憑依という形で利用され

色々とダメージを被ってきた経験が走馬灯のように脳髓を駆け巡る。

包丁を握れば（智春の手が）血まみれにされ、

揚げ物の真っ最中の油の中に（これまた智春の手を）突っ込まれ、

拳句の果てにや明らかに食物と呼ぶには禍々しい謎の物質を

「もったくないじゃん！」と無理やり喰わされ・・・

相手が違ったら人間不信に陥りそうなレベルのトラウマを植え付けた相手

智春は容赦なく睨みつける。その隣で同調するようにアニアもうんうんと強く首肯。

「お前の料理はアレなのか？」

食べた人間を物理と精神の同時攻撃で破壊し尽くすことが目的なのか」

『ニアちゃん酷っ！それ料理に対する考察じゃないよね絶対に！？』

「十分兵器だろ、あの味の威力は・・・」

いつか智春の巻き添えをくらってまさしく地獄を味わった少女の声は震えていた。

尊大な少女のいつにない怯えっぷりに周囲もざわめき始める。

どんだけなんだよ、水無神の手料理・・・

ニアちゃんあんなに震えちゃってかわいそ・・・

いくら美少女でも手料理で死にたくわないわ・・・

気付かれていることなど百も承知でなおも続くひそひそ話。それを甘んじて聞き続ける

操緒の額に浮かぶ怒りマークには、だがまだ誰も気付かない。

天災料理人ってぴつたりのネーミングだな

あいつの料理なら古城でも殺せんじゃね？

ナラクヴェーラ何体分の破壊力あんだか・・・

ピシ・・・ピシ・・・

ぶちぎれる寸前の血管の膨張する音を、智春は確かに聞いた。

現実じゃありえねー下手さだよな、台所吹き飛ばしかけるとか・・・

食材もご愁傷様・・・
いや一番のご愁傷様はむしろ智は・・・

シユン！

る、と無責任な誰かさんが言うことは叶わなかった。

先とは比べ物にならないほどの速度と力で憑依した操緒が智春の腕
を使って投げた

細長い器物　プラスチック製の箸の片割れが教室前方の黒板に突
き刺さったからだ。

啞然とするクラスメイト一同。一体どんな膂力で投擲すればそんな
ことになるのか

箸は半分以上暗緑色の面にめり込み、周囲には細かいひび割れが無
数に入っている。

恐る恐る近付いた樋口琢磨がそれを引き抜こうとした途端亀裂は一
気に全体に広がり、
盛大な音を背景音楽に一気に崩落した。

「・・・」

一瞬前まで黒板だった残骸の欠片を、樋口は放心したような表情の
まま頭上に掲げた。

少女の予想以上の怒りを買ってしまったことに今更ながら気付いた
一同は

それから昼休みが終わり教育実習生のアルマン・ジェレマイアが
入室・困惑するまでの十数分間、喪中のような静けさの中で時を過
ごした。

学園からほど近い複合ビルの一室、その扉の前のベンチに腰を下ろし智春は欠伸を噛み殺していた。

目の前には両開きの扉、その脇に掲げられた紙に書かれているのは今この室内で催されているカルチャースクールの名前。

先ほど少しだけ覗き見えた部屋の中にはいくつもの水場や調理器具が並べられ、

『料理をする場』という印象をことさらに強調している風にも見えた。

一人残された智春は手持無沙汰にロビーでもらったチラシなどに目をやりつつ、

何事もない幼馴染の帰還をただ待っている。

「皆さん今日はよくおいでくださいました」

本日の講師を務める女性が言い、生徒たちがそれに頭を下げる。

最後列の操緒もそれに倣いつつ、調理台の上に並べられた色とりどりの食材に

ちよつとだけ目を見張る。野菜から肉から魚介から・・・

普段なら絶対に手を付けることのないような種類・値段の食材が無造作に置かれている光景に調理下手なりにやる気がわいたのか、自身をみなぎらせたように

『よしっ』と自分に聞こえるだけの大ききさで気合いを入れなおす。

料理を習おうと思ったのに特段の理由はない。

言ってみれば単なる気まぐれ、思いつきだった。しかし今は少し違う。

智春はじめ先日散々馬鹿にしてくれたクラスメイトたちの鼻を明か

してやりたい、

それが今彼女を突き動かす感情のほぼ全てになっていた。

この日の為に予習としてレシピ本を読みあさったり、

料理上手な知り合いにコツを聞いたり・・・

日頃から続けてやっていけば上達するだろうこれらを突発的に、

しかも今回のこのカルチャースクールの為だけにやるといふあたりかなり努力の仕方が間違っている気がするのだが、しかし残念なことに

暴走特急のようにただ一つの目標に向け突き進む今の操緒に

そんな思考の余裕は存在しなかった。

グツ、と握り込んだ拳にはいつも感じている以上の感覚　実体と

しての感覚がある。

今回ばかりは乙女心かはたまた女の意地か、

智春に頑張っているところを見られたくないとかで彼への憑依は早々に廃案、

『学園の便利屋』のようになっていた図書委員長　ダリアンに土下座で頼み込み

やっと借り受けた幻書　霊体の現世への干渉能力を常人と同じ程度

度まで強める

『仮身かしんの書』の効力で今の彼女は一時的とはいえ

生身と変わらない活動が可能になっていおる。

そんなことの為に幻書使うのかよ、と呆れていた智春の顔もしかしたら些細なこと。

操緒は説明を始めた女性講師の言葉を一言も聞き逃さぬよう

いささか真剣過ぎる眼光をもって前方を見据える。

「生徒たちはみんな帰ってしまったけれど・・・まあいいでしょう。さあ旦那さま、お待たせして申し訳ありませんでした。すぐ最高の料理をご用意いたしますわ」

レズリーの耳打ちに男は獣のような興奮の声を上げた。

料理人の腕には細身のナイフ。華麗な手際で振るわれるそれは蓋を開けられた器の中、

“最高の食材”を寸毫の狂いなく切り取った。

窓の外にはいつの間にか星が輝き、

美しくも魔と狂気を宿した月光が全てを照らしている。

「料理人は刃物を使って人を幸せに出来る唯一の仕事」ってどっかのばあちゃん

オチの意味分らない人に一応言っとくと

これ元ネタかなりグロイっす。

あまりにあれなんでちゃんと描写する気になれず

こんな中途半端な感じに・・・

パフューム・チエイサー

「ない・・・」

陰鬱な声を漏らし、倉澤六夏は精神崩壊でも起こしたようにその場に力なく崩れ落ちた。

常日頃の悪徳金融業者顔負けのあくどいオーラもどこへやら、混乱に目の焦点もろくに定まらない彼女の周りでは同じように数人の女生徒がへたり込みうめき声をあげている。

夏休み真っ盛りの三雲学園女子更衣室から流れ出た声はどこまでも重く沈む負の気配・・・

「下着泥棒？」

そうよ！と気丈に言う第二生徒会長様にしかしヒューイはどう反応したものが困ったように肩をすくませた。

傍らの椅子に腰かけたダリアンは最初から聞く気など微塵もないように、

暇を持て余しているような緩慢な挙動で電話帳くらいある分厚い魔導書を

欠伸混じりに読み進めている。

「それも午前中プールに来ていた女生徒全員分だよ！

さっさと犯人見つけて血祭りに上げないと気がすまないわ・・・！」

鼻息荒く力説する六夏の背後では同じく被害者なのだろう

女生徒たちがシンク口するように強く強く首を上下に振る。

事件が発覚したのは今から30分ほど前のこと。

ひとしきり水中で遊び倒した六夏たち女生徒数人が

更衣室に戻り私服に着替えようとしたところ、他の服と一緒にしまっておいたはずの

下着が姿を消していることに気付いたのだそうだ。

第一陣の騒ぎを聞き駆け付けた後続たちも同じ有り様、
恥じらいと怒りに燃え立つ少女達は猪突猛進の勢いで
ヒューイとダリアンのところへとやってきたということだった。

「よく分からないんだが・・・その話の流れで

どうして僕たちの所へ来るのか説明してくれないか？」

頭を抱えるヒューイにもしかし六夏はまったく悪びれる素振りすら
見せないで

「え？いやだつてあんたら便利屋みたいなもんでしょ？なんてつた
つけあの変な本・・・

あれ使えば下着ドロの一人や二人くらい簡単に・・・」
「「帰れ」」

青年からはにこやかな、黒衣の少女からは辛辣な声音で撤退命令が
下された。

「なによあいつら。役に立たないわね」

図書室を追い出された六夏はイライラと髪をかきながら携帯をいじ
くっている。

登録してある番号から比較的よく使うとある番号をよどみなく選択、
通話ボタンを軽く押す。

プルルルル・・・

呼び出しの時間がひどく長く感じるのは現状と無関係ではないだろ
う。

ストレスが時間感覚を引き延ばし、それがまたストレスのタネにな
る・・・

悪循環を断ち切るように通話が繋がったのは10回ほどコール音が

なつた直後。

「私よ」

「会長？どうしたっスか？」

名乗らず一方的に会話を放り投げた相手は第二生徒会所属 真日和秀。

何かと使いつぱしりが似合う彼の使い魔 ドクター ヴィヴィアンは風獣、いわゆるカマイタチだ。その機動性と嗅覚をもってすれば犯人の搜索と追跡、

ひいては捕縛と制裁くらいわけない……いつものように皮算用をしていた六夏だったが。

「緊急事態よ真日和。今から30秒以内に学校に来なさい」

「ええ！？ちよ、ちよっとそれは無理っスよ」。だって今自分病院っスし……」

「は？病院？」

聞き返すついでに耳に意識を集中してみれば確かに背後で大勢の人間がなにやらざわざわやっている気配が電話越しにも伝わってくる。

「いや、参ったっス。まさか使い魔 ドクター がインフルエンザにかかるとは夢にも思ってたなかつたっスよ」

「って、あんたじゃなくてヴィヴィアンの方の病院かい！」

予想を二、三分ほど踏み外した六夏は軽くめまいを覚える。

彼の話を総合するとつい先日からヴィヴィアンは咳や食欲の減退など体調が目に見えて悪化していたらしい。その様子を気にかけた真日和に連れられ

診てもらった動物病院の医師による診断は季節性のインフルエンザとのこと、

処方された薬をしっかりと飲んで安静にしていれば数日で治るといいう見立てとのことだった。

「そう言う訳で会長すいません。どんな仕事かは知らないっスけど今回自分はパスってことで。」

ヴィヴィアンに付きつきりで見病しなきゃなんで」

かけた側の六夏と同じように一方的に言い切り、通話はあちら側から切断された。

わなわな、と六夏の拳が小刻みに震え。

「あ、あんの役立たずがああああ！」

人目もはばからぬそのシャウトに偶然近くを通りかかった男子生徒が一瞬ビクリと身を硬め。

「・・・あん？なに見てんのよドロドロに溶かして下水に流してあげましょうか!？」

「ひ、ひいいいい!!!」

体の内に充満する毒気を込めた視線はまさに般若のソレ。

糸屋の女は目で殺すというが今の彼女なら本当に眼光だけで5、6人ほど殺せそうな殺気だ。

そんな視殺の凶器を絶賛展開中の彼女にだから後ろから

「ねえ」なんて気軽に声をかける人間は普通に酔狂か、

もしくはただ空気が読めないだけの天然さんかのはずなのだが。

「ねえあなた。なにか困ってることがあるでしょ?」

ああん?とヤンキーよろしく舌打ち混じり、声の方へと六夏は顔を向けた。

そこにいたのは見慣れぬ女性だった。白衣をまとった小柄な少女。

「誰よあんた?三雲学園の生徒・・・じゃないわね。誰かの知り合いい?」

「まあそんなところ。ほんとに友達に会いに来ただけど、なんだかあなた面白い匂いがするわ。」

ささずめ事件の匂い、ってところかしら」

言って、彼女はなんの前振りもなく六夏の首筋に顔を近づけてきた。

「なっ……」

突然の見知らぬ少女の奇行に寸前までの怒りも一瞬忘れ、六夏は驚きに身を強張らせる。

スンスン、と首筋をなでるように白衣の少女の鼻孔から洩れる空気が肌を揺らす。

「ふむふむ……金属の匂いが数種類……拳銃と銃弾か。」

あとこつちは銃弾の火薬のだし……紙幣の匂いも濃いなー……何やら一人問答しているらしい彼女に耐えるのもしかしてそこが限界だった。

「ああもう！いい加減離れなさいっ！」

無理やりひっぺりがし、六夏は少女を落ち着けるため少しだけ距離を開けた。

このままじゃよく分からないこの女に振り回されるだけで何も進まない。

そう判断し六夏は状況をリセットするべく「えっと……」と自ら前振り、

興奮気味だった白衣娘もようやく落ち着きを取り戻し冷静に効く姿勢。

「じゃあいくつか質問するわよ。まずあなた、名前は？」

「アラン・スミシー」

「冗談言ってる在眉間に風穴開けるわよ」

「嘘ですフィオナ・ファメニアスですこれ本名！」

ホルスターに手をかけた所で本気と分かったのだろう、少女　フィオナは必死に訂正する。

「変なウソつかれても面白くもなんともないのよ……ってファメニアス？ファメニアス社？」

相対する少女の姓に気付き、胡乱気に聞き返す六夏。

一方のフィオナはまだ完全に戻り切っていない（戻し忘れている）銃器を

目の端で追いちょっとだけ怯えつつも「あ、うん」と軽く返す。

「ファメニクス社は私ん家でやってる会社。で、私その主席研究員」

「・・・マジで？」

「うん、マジで」

六夏が驚くのも無理はない。

ファメニクス社といえば世界的なシェアを誇る化粧品メーカー、特に香水部門では並ぶものがないと言われるほどの超・大企業である。

そんなとこのお嬢さんでしかも主席研究員様とやらが、

何の因果でこんな現代の魔窟みたいな学園に迷い込んだのか・・・

「予定の時間まではまだもう少しあるし・・・さっさと見つけちゃいましょうか？」

そう告げフィオナは六夏の腕を掴んだ。それほど強い力で握られたわけではない、

普段から荒事に慣れまくっている彼女なら簡単に振り解けるはずの手を

しかし今ばかりは事態の度重なる急展開に困惑しきりの六夏にはそれを解くのが正解かあるいはそうでないのか、判断するにはあまりに不足要素が多すぎて。

「ちよ、ちよっと急にどこ連れてく気あんた?! 見つけるって一体なにを・・・」

「探しもの、あるんでしょ？」

ハミングするような耳に心地よい響きでフィオナが呟いた。

その言葉でようやく自分のつい先ほどまでの怒りとその原因 下着ドロ の記憶を回復し

「ああああそうだったああああ!!!」

馬鹿な自分に頭が痛くなる第二生徒会長。そのままの勢いでガバリと自分からもフィオナの手を握り返すと。

「ねえあんた分かるの犯人・・・っていうか私の下着の在り処あじか！？
どこ！？というよりなんで私が下着探してるのなんかわかったの！
？」
立て板に水の勢いでまくしたてる六夏。フィオナは困った笑顔でと
りあえず
一番無難な答えだけを口に出す。

「とりあえずあなたの下着はこっち。ついてきて」

クンクンと鼻を鳴らす彼女の様子は、
なぜか優秀な警察犬を見ているような信頼感を六夏の本能に抱かせ
た。

フィオナが案内したのは先ほどまでいた第1校舎の影、ごみ処理用
の焼却炉などが設置された区域だ。
用務員が掃除で訪れる生徒くらいしか寄り付かない、あまり目につ
かない場所にソイツはいた。

「こ、コイツが犯人・・・」

脱力するように肩を落とす六夏の隣、好奇心に輝くフィオナの目が
捕らえるのは黒く蠢く塊。

軽乗用車程の体積はありそうなそれは有機物的な脈動に体を揺らし、
捕ってきた獲物を自慢でもするかのように自分の周囲に飾っている。
大量の女性用下着を満足そうな雰囲気で寝床へと並べ、

漆黒の不定形獣スライム アニア・フォルチュナの姉 クルステイナの使ト
い魔ウタ

イングリッドはすっかり全身をとろけさせている。

「そつえばこいつ、前にも下着ドロして大騒ぎになったことあったわね。」

あの時に変な趣味にでも目覚めちゃったのかしら……」

彼女の言う前の騒ぎというのはまあ話すともものすつごく長い上にものすつごく重くなりそうなのでここでは割愛させてもらおうとして

(どうしても知りたい人は原作「アスラクライン」4巻読んで都合よく妄想してください)、

しかしさてどうしてイングリッドがこの学園にいたのか？

彼(彼女?)の飼育的存在の3人

クルステイナ、かがかがり たかや加賀篝隆也、あひやしな新屋敷琴里は

この学園のOBやOGではあるが現在のところ関係は薄く、こんなところにペットを放し飼いしておく道理はないはずだが。と

「あ、やっと見つけた！よかった、心配したんだぞイングリッド？

あれ、倉澤会長どうしたんですかこんなところで？それにこの……その、下着は一体……」

ご都合主義よろしくやってきたのは生物部部长 シエズ・ハーストン。

慌てて視線をそらした彼にもう六夏は情性だけ、精神的なアップダウンを繰り返し疲れ切った声のまま一応訊ねてみる。

「あんたえつと……シエズだっけ？どつたの、その子？」

返ってきた声は、しかし今の六夏の耳にはどこか遠く響き。

「イングリッドですか？ちょっと今うちの部で預かってるんですよ、

飼い主の方たちが海外旅行だとかで。

さつきちよつと目を離した隙にどっか行っちゃって、慌てて探してたんですけど……」

そこまで聞き終わる頃にはもう六夏の意識は風化しかけていた。いつの間にか彼女の傍ら、あの白衣の少女が消えていたことに気付けないくらいに。

「なかなか面白そうなところね、この学校」

図書室の机に行儀悪く腰掛け笑うフィオナにヒューイも小さく口の端を上げた。

同じ机の反対側では本を読んでいるうちにいつの間にか眠りこけてしまつたらしく、

ダリアンがすやすやと小さな寝息を立てている。

ありふれた光景、だからこそどこか寂しさと切なさが込み上げてくるような

夕暮れに染まつた図書室の光景。

「生徒や先生にも何人があつたけどみんな個性的というか……」

うん、そう。はっきり言えば変人揃いつてところかしら？」

「否定はしないよ」

とぼけたようなフィオナの言にしかしヒューイの方は真面目っぽく言い返す。

「生徒会が3つもあつて世界最強の吸血鬼がいて女の子だけの傭兵の部活動があつて……」

読姫が3人いるだけでも相当に変わったところだよ、この学園は」

言いながら、しかし彼の口調はとても楽しげで。

「……その通り」

「……その通り」

言つて、ヒューイは手元にあつた封筒をフィオナの方へと差し出す。その中に入っているのは数枚の書類　この学園への転入手続き関連のものだ。

「しかしフィオナ、本当にいいのかい？」

君なら生徒じゃなくても教職員としても雇つてもらえると思うけど？」

会社の主席研究員だつた彼女の能力は伊達ではない。

その気になれば理科系の教職や保険医の免許くらいならすぐ取得できそうな気もするのだが。

「それもいいアイデアだけど・・・やっぱり遠慮しとくわ。テストの採点とかするの面倒だし」

ああそういえば。と前置き。フィオナの唇がニヤリとつり上がる。

「さつきものすごい面白い子がいたんだけど、

裏工作とかでその子と同じクラスになるようにできないかしら？」

悪戯を企む子供のような喜色の目の光に、ヒューイは軽く頷いた。

このしばらく後、いざ工作作業の段階になつてヒューイが訊ねた時、「そういえば名前聞き忘れた」とフィオナがヒューイに告げた“ものすごい面白い子”は

彼女曰く「銃と火薬とお金の匂いが似合う女の子」とのことだった。

SS 焼き芋ファイヤー（前書き）

今回はほぼセリフォンリー回です！
地の文は数行分しかありません。

SS 焼き芋ファイヤー

桜狩沙々羅「ちっ・・・やっぱり火力が足りねーな」

樗宮鳴々葉「どうしましょう？このままじゃ生焼けになっちゃいそうですけど・・・」

ハル・カムホート「？こんなところで何をしている、お前たち？」

沙「あ、アニメでキャラデザイン思いっきり改竄された人」

ハ「キャラデザ改竄された人ではない、焚書官だ（苛）」

沙「まあそういちいちムカつくなんて。事実を言っただけじゃねーか・・・」

で、私たちだけど、見りゃわかるだろ？」

鳴「落ち葉がだいぶあったから燃やすついでに焼き芋しようと思っ
て」

ハ「焼き芋？」

沙「だいじょぶだいじょぶ、んな怖い顔で心配しなくてもちゃんと
水も用意してあるし」

芋もスーパーで買ってきたやつだから」

ハ「その言い草だと買ってこないという選択肢もあったように聞こ
えるが？」

沙「たださー、これなんかいまいち燃えにくくてさ。マッチも使い
切っちゃまったし」

鳴「葉っぱも少し湿ってたし・・・やっぱりなにか新しく火種でも
持ってきた方が・・・」

ハ「燃やすものならここにがあるぞ？」

沙・鳴「へっ？」

ハ「カートリッジボート 幻書装填 ブレイズ 起爆！」

鳴「ああああ！お芋が！お芋があああ！」

ハ「ちょうど処分する予定の幻書をもっていて良かった。

こういう使い方なら有益ではあるだろう」

鳴「火力考えてください燃えてます燃え上がってますせつかくのお芋が灰になります!」

沙「なるほど、その手があったか・・・」

鳴「先輩もなに感心してるんですか!?早く水を・・・」

ハ「この魔力の炎に普通の水は効かんぞ。」

さつさと消したいなら橘高か姫柊かミスリルあたりでも呼んで

魔力ごと打ち消すか・・・」

鳴「その人たち連れてくる前に燃え尽きてますよどう見たってこの勢い!」

沙「もついい。二人とも、ちよつと離れてろ」

鳴「先輩?・・・ってなんで聖衣着トウリツてるんですか!?というかいつの間に?!」

沙「このほぼセリフオンリーのSSじゃ細かいことはいつも以上に気にすんな。で」

ハ「?何をする気だ、桜狩?今言ったようにこの炎は普通のやり方では消えな・・・」

沙「どりゃああああ!」

鳴・ハ「?!!」

沙「凍れええ!!!MS240by冷却モード!」サクヤ

鳴「って先輩ダメですそれはホントにやったらダメです!

原作でも設定上しか公開されてない能力使ったりしたら

どんなことになるかあああああ!?!?!(能力の余波で

凍結)」

ハ「ぬお!? (同じく凍結)」

沙「っはははは!だからそんな細かいことは気にすん・・・ (凍結)」

天高く馬肥ゆる秋の日、三雲学園。

局地的なブリザードに見舞われたかのように全てが白く凍りつき停止した世界から

元凶たる女子生徒まで含めた全被害者が救出されるのは、その日の深夜を過ぎた頃だった。

SS 焼き芋ファイヤー（後書き）

たまには違った形式にも挑戦してみようかな・・・とか
思っちゃった結果がこれ。

次回からは普通に戻します。

ただもしかしたら筆が進まない時とか気分展開にまたやるかも・・・

マネーの虎（前書き）

野球ネタですがルール全然知らないの
おかしなところなどあったらどうかご容赦ください。

マナーの虎

「ようやく決着を付けるときが来たようね、天乃羽々姫。

まあせいぜい互いに全力を尽くしてプレイすることにしましょう」

そう言うてにこやかに笑み差し出された六夏の右手に負けないほどの笑いで返し、

羽々姫は当然それを払いのける。予想外の力を受け弾かれた掌の内側をよく見れば

小型の剣山らしき代物が張り付けられ、痛々しい銀の輝きを晒している。

グラウンドに集結した面々はそのあまりにあからさまな攻撃行為にある者は戦慄したように身を強張らせ、またある者は露骨に恐怖しかしし当の羽々姫はまったく何事もなかったかのように怖い笑顔を顔に張り付けたままだ。

「ははは、やだな〜先輩手に剣山なんか付けちゃって〜。それじゃポールも握れないですよ〜？」

表面上は天使のような、だが絶対的に邪悪の、いやむしろ“魔”と呼んでも

差し支えないくらいの真っ黒いオーラを纏ったスマイルを見せる羽々姫に

周囲の人々の間から幾つもか細い悲鳴が立ち上る。

「あら〜ごめんなさい私つたらついうっかりして〜。

今朝は心を落ち着けようと花を生けてきたものだから〜多分その時のかしらね〜？」

「そうですか〜試合前に気付いてよかったですね」

「ええ、本当によかったわ」

六夏の白々過ぎるウソにもしかしツッコミの一つも入れず、

羽々姫はただ哄笑を空間に響かせ続けている。

彼女につられるようにあるいは競うように、六夏も普段ともまた違う

『テンプレイメージのお嬢様っぽい笑い』でオホホホ・・・なんてよろしくやってきてしまっている。そんな二人の少女をどこか遠い虚ろな目で見つめ、
背後に整列した各チームメンバーたちは重い溜息を吐いた。

三雲学園野球大会、と銘打たれたこの大会の開催が発表されたのはつい3週間ほど前のことだった。

各クラスでのSHRで配布されたり掲示コーナーに貼り出された紙に書かれたその内容は

簡潔に述べれば学園主催のトーナメント形式の野球大会、その説明だった。

元々イベント好きな人材が集まりやすいこの学び舎においてこの手のイベントは

積極的に受け入れられるのだが、今回はしかしちよつとした波乱を呼んでしまいそうな要素がしっかりと印字されてしまっていた。

曰く、『優勝賞金一億円』というその文字が。

これにまず真つ先に反応したのは当然ながら常日頃から金に困っている連中だった。

鳴桜邸の下宿代をバイトで稼いでいる夏目智春を筆頭に

ちよつと前に起こしたとある事件の裁判費用に充てたいルードルフ・オイスタツハヤ

最近装備一式最新式に買い替えちよつとだけ金欠気味の黒崎朱湊、

更には破産寸前とご近所でもつぱらの噂の自称投資家 ハロルド・

ドーンまで・・・

生徒のみならずなぜか全く関係ないはずの社会人までエントリーしたこの大会に、

しかし最も執念を燃やす女性が二人ばかり存在した。

一人は第二生徒会生徒会長にして学園一の守銭奴 倉澤六夏。

そしてもう一人、シユラウド部に籍を置く1年で元アイドル、現借金傭兵の天乃羽々姫。

立場も最終的な目的もまったく異にするこの二人がしかし、

「金を稼ぐ」というこの一点においてだけは互いにどこまでも譲り合わない

云わば因縁の関係にあることはこの学園の生徒の誰もが認知している事実だった。

ある時は超高給のバイトを奪いあい。

またある時は競馬場で鉢合わせし大騒ぎになった拳句あやうく補導されかけ。

そしてある時はエイプリルフルに沙々羅が流した徳川埋蔵金の噂に二人仲よく踊らされ。

そんな「金」を挟んで向かい合う両者がこんなでかいチャンスを見逃そうはさすがなかった。

大会の情報を得た二人はその直後には既に自チームのメンバーを勝手に選抜、

これまた勝手にエントリーまでやってしまったのだった。

当然選ばれた面々は断固として抗議しようとしたが、

口を開く間も与えられず鉛玉を頭上すれすれに打ち込まれ、

クロックアップ並みのスピードで殴られ、蹴られ斬られ叩かれ窓から突き落とされ・・・

暴力という名の怪物に勇敢な交渉役が蹂躪され帰還するまで、双方20分もかからなかった。

その後、正式にそれぞれチームを結成、毎日練習に励む傍ら深夜まで必死に野球の勉強をしたり、相手チームの弁当に下剤仕込んで、

効率的な選手の運用方法を考案したり他チームの練習してる所に野良犬送り込んだり

ドラッカー読んでマネジメントしてみたり不幸の手紙送ったりバットをウナギにすり変えたり3塁ベースだけ高さ2メートルくらいにしてみたり・・・

まあそんなこんな裏工作の結果、野球大会当日。エントリーしたチームのほとんどが事前棄権、第1試合が事実上の優勝決定戦と相成った。

「！っは！」

カキーン！と心地よい軽金属音をたて飛んで行く白球。バットを放り捨て走り出した

シエズ・ハーストンは獣人モードで一気に2塁まで駆け抜けようとするが、

レーザービームの勢いでこちらへと戻ってくるボールを視界の端に捉えると即座に反転、

無難に1塁でその足を止めた。と、

「ちよつと審判！今の何よ明らかに反則じゃない!？」

試合開始からもう何度目か、ベンチから猪突猛進の勢いで審判へと食ってかかるのは

『シックス・サマーズ』のキャプテン 六夏。

ストレスを少しでも鎮めようとさっきからずっともぐもぐやっっているドーナツの砂糖の

キラキラとした結晶を唇の周りにつけ、彼女が睨むのはつい今しが

た返球が来た先、
あともう少してホームランになるか否かというグラウンドの端の位置。

そこを守備するのはたった一人の小柄な少女　ただしその全身は空中に固定され、

虹色の輝きが巨大な人の形をとって彼女を包み込んでいる。

「あんなドでかい腕の全力投球なんか当たったら最悪死ぬわよ!?
運が良くても骨折するわ!」

「いや、でもね〜・・・」

歯切れ悪く言い、審判の親父は困ったとばかりに額を軽くかく。

試合の中断が気になったのか、双方のベンチでざわざわとささめきが聞こえだす。

それが余計に六夏の癪に障る。

「と・に・か・く!今の球がなきや確実に2塁までは行けたんだし、
ペナルティってことでシエズを進ませて・・・」

「何を今さら。そういうことは自分がやったこと省みてから言うてください」

「っ羽々姫!」

肩越しにかけられた声に反射的に六夏が振り向くと、

羽々姫が小さい子をたしなめる母親のような妙に迫力のある視線を
ちよつどこちらに向けていた。

さらに話し合いの内容でも気になったのだろうか

人影とその中の少女

アスタルテと眷獣

ロトタク “薔薇の指先”テュロス

てくる。

事態が上手く呑み込めてないらしく小首をかしげる幼女へ羽々姫は
向き直って。

「ねえアスタルテ。この子もうちのチームの一員だよな?」

「肯定。“薔薇の指先”は私という存在の一部分であると認知する

ことが可能です」

淡々と告げる少女の周りからはいつの間にか虹の輝きは失せ、
ふわりと地面に着地する靴音だけが微かに六夏の鼓膜に入ってくる。

「ひ、卑怯な……」

「それはお互い様です」

苦虫を噛み潰すように表情を歪める六夏にもだが羽々姫は
平然とした態度を崩す気配もなくそう言っただけだ。

六夏率いる『シックス・サマーズ』VS羽々姫率いる『ハバキーズ』
(ダブルでネーミングセンスゼロ!)の頂上対決はまさに混沌の極
み、

なんでもありの超乱戦の様相を呈していた。

というか、元々が勝利の為に相手チームを事前の裏工作で封殺して
しまうような

(リーダーが)イカれたチーム同士、普通の試合になるわけがなか
ったのだ。

それはたとえば智春が“クロガネ 鐵” 召喚してボールの代わりに

“黒の拳撃”の重力球投げたり(バカ正直に打とうとした古城は病
院送り)。

数合わせに入れた殺人人形たちとメルガルさんウイジェットとこの娘さんたちが
暴走してフルボッコにし合ったり。

羽々姫がAS552クシナダの生体時間加速でバントで罫一周しようとしたり
それに事前に勘づいていた加賀篤が“ロードナイト 薔薇輝”使って
周囲の地盤ごと時間止めたり……

まあそんな珍プレー多め、というか珍プレー・反則プレーしか存在しない試合も

いよいよ大詰め9回裏、攻撃は八バキーズ。打席に立つハル・カムホートが構えるのは

毎度おなじみ彼のアイデンティティ 災厄の杖。

もうバット使わないことくらいじゃぴくりとも反応しなくなった審判を尻目に

焚書官が見据える先にいるのは巨大な黒と銀の巨人 先から常識外れの、

むしろ常識に収まれる要素が微塵も見当たらないレベルの重力ボールを連投している

人工の悪魔 “クロガネ? 鐵・改”。少し離れたベンチに腰かけた智春は
アスラ・マキナー気だるそうに自身の機巧魔神を眺めていたが、

そのうち後ろにいた羽々姫に促されるように小さく右手人差し指を振った。

刹那、ビュン!ともブン!とも判別付かない黒い風切りの音がハルの杖の横を掠めた。

恐る恐る、視線をズラし彼は本来ならキャッチャーが居るはずであろうその場所を見た。

遙か遠くのビルに、ぽっかりと丸い穴が開いていた。

「ストライク!」

「いや待て審判!いくらなんでもあれはやり過ぎだろう!?!」

掴みかからんばかりの勢いで審判に迫るハルの額には嫌な感じの汗がうつすらと滲んでいる。

まあ一般人が当たれば即死どころか完全消滅の危険性すらあり得るボールが

自分のすぐ隣を抜けていったとなれば大抵の人間は慌てるだろうが。

「いや〜でもね〜さっきからもう彼、っていうかあの黒いロボット?

何十球も投げてるし今更止めるともねえ・・・」

「貴様仮にも審判だろう！今からでも遅くない、さっさと反則と・・・」

「その必要はありません」

怒りに声を荒げかけるハルを御するようになり、凜とした声音が響いたのはその時だった。

寸前までいたバッターボックスの方へと目を向けた焚書官の両目が見たのは

いつの間にか打席に立ち、毅然と前を見据える少女の後ろ姿。

「怨みはありませんが古城先輩の仇、私が討たせてもらいます」

告げ、姫柊雪菜は木製バットを握り込む。お世辞にも立派とは言えないそのフォームに

両チームのベンチや暇で集まっていた野次馬たちからも心配する声に時に大きく、時に小さく聞こえてくる。

無理もない。見た目普通に可憐な中学生でしかない彼女が、何をどうやったら最強の機巧魔神の滅茶苦茶な威力のボールを打てようか。

自殺行為。そんな言葉がよぎる間もしかし“？鐵”は投球フォームに移りつつあった。

流石にヤバい、と慌てて停止命令を下そうとする智春だったが、一瞬遅かった。

瞬間的に生成された重力の螺旋が野球ボールサイズまで集約し、放たれる。

投げたそのポーズで完全に動きを凍結した“？鐵”の腕の直線上、常人の動体視力では到底見ることなど叶わないほどの超加速で雪菜へと迫る破壊の一撃を

八バキーズ側のベンチからしつかりと視認し、彼女に近い素質をもつ橘高冬琉はしかし焦るでもなくむしろ納得したように「ああ」と短く呟いた。

投球の瞬間、何を思ったのかバットを投げ捨てた雪菜は足元に置いてあった

ギターケースの蓋を乱暴に蹴り開けその勢いそのまま手元の高さまで投げ出された中身

機構変形槍“雪霞狼”せつかろうを掴むと一気に展開、

「！つはあああ！！」

僅かもない時間で練り上げられる気力の全身全霊をもって重力球へとその刃を喰い込ませる。

おお！とグラウンドのあちことから上がる歓声。

バチバチと衝突面から散り続ける火花のような輝きは

魔神相剋者と“雪霞狼”、拮抗する二つの力が

互いに互いを喰い合おうとしている証拠だ。

冬琉の“元演操者”エクスハンドラー 体質や

ミスリルの“破邪の銀”ミスリルと同じ魔力無効化能力を付与された、

対真祖用の最強の霊槍 シユネーヴァルツァーそれが七式突撃降魔機槍 雪霞狼の性能だ。

バリバリバリ！！

『！』

雷鳴じみた甲高い轟音に、思わず周囲の人間たちは目と耳を塞ぐ。

ジャツジすべき審判も試合に見入っていた観客たちも、

この攻防に誰よりも熱意を注いでいた両チームのキャプテンさえも遂に『決着』まで目を開けていることはできなかった・・・

「・・・はあ」

遙か天空を緩やかに流れていく入道雲を見上げ、しかし羽々姫の口から洩れるのは溜息ばかり。

「・・・ちよつと 안타、さぼんじゃないわよ。まだ半分も終わってないんだから・・・」

「分かってますよ・・・」

隣で同じように頂垂れていた六夏に促され、しかし今日は珍しく言い争う気配すら見せず二人は仲良く並んで手と足を動かし続けた。

彼女たちの目の前には野球場　正確にはその残骸、もしくは遺跡がただ広がっているだけ。

草木はペンペン草の一本まで全て消滅し、地面はひび割れあるいは隆起し、

野球用の道具はことごとく粉碎され・・・

これらは全て先日の野球大会最終回、

“？鐵”と雪菜の衝突の余波でまき散らされた破壊の形跡だった。

強力に過ぎる魔力の暴走をモロに受け野球場は壊滅的被害、

彼女たちの配下だった各チームメンバーたちも今頃は仲良く病院のベッドの上だろう。

「もうちよつとで勝てたのに・・・もうちよつとで借金減らせたのに・・・うう」

泣きごと言いながら地面を整備する羽々姫の左腕にはギブス。

六夏共々リーダーの責任として後処理の全てを放り投げられた彼女は動かすたび骨に響く痛みを涙目でこらえつつ、

お流れになった優勝賞金の一億に未練たらたらのご様子だった。

おまけ

メンバー紹介

シックス・サマーズ

倉澤六夏 暁古城 姫柊雪菜 クルステイナ・フォルチュナ イン

グリッド

加賀篝隆也 シェズ・ハーストン 殺人^{ウイジェット}人形（数合わせ）

ハバキーズ

天乃羽々姫 ハル・カムホート 夏目智春 桜狩沙々羅 アスタルテ

橘高冬琉 メルガルの娘たち（数合わせ）

クリスマスの奇跡

「リア充全員爆発しろ・・・！」
食堂の二画からまき散らされるドス黒い負のオーラから逃げるように生徒たちがそそくさと退散していく。

特に男女で仲良く談笑していた連中などはまさに脱兎の勢い、我先へと逃げだす少年少女らの後姿をしかし見送る心のゆとりすら今は持てず、

アルマン・ジエレマイアはただ虚ろな怒りを瞳の奥で静かに燃やしヤケ酒をあおっていた。

12月24日。世に言うクリスマス・イブの夕方。

窓の外へと視線をやれば深々と朝から降り続く雪は未だ止まず、ホワイトクリスマスをこれでもかとはかりに演出している。

そんな世間で言えば恋人たちの一大イベントでもあるこんな日に学校内で酩酊しクダを巻く女難の教育実習生の姿はあまりに不吉で、一人身・カップル問わずそんな空気の下から逃亡を図ろうとするのは当然と言えば当然の帰結だった。

「はあああ・・・なんでよりによってこんな日に・・・」

頭を抱え苦悩するアルマンの両腕に抱えられたガラス瓶の中で芋焼酎が綺麗な揺らぎを見せる。

ガラス表面を結露のように伝い落ちる雫の出所を見れば瓶に顔をうずめ男泣きに泣いている童顔の青年の頭頂部がこちらを向いている。

「そりゃ自分にも非がないわけじゃないってのは分かってるけどさ・・・
でもせめてこっこの気持ちをもう少

「どうかしたの？浮かない顔してるけどー？」

「しつてうあ?!」

ひとりごちていた所に急に割り込まれ、ただでさえ周りの様子に気が行っていなかったアルマンは
情けなく驚きそのまま椅子から転げ落ちる。

「あらあら大丈夫ー？腰とかうつてないかしら？」

転げ落ちた体勢から見上げる形になったその先には口許に緩い笑みを浮かべ

マイペースに笑う少女が一人。

「いや別に・・・それより突然何か用かい？えっと確か・・・」

「2年の小揺木音々こゆぎねねよー。ちなみに部活はシユラウド部と保健部」

「あ、ああそう・・・」

いや後半の情報に特に求めていないんだけど、と言いつつ立ち上がり服の汚れを軽く払うアルマン。音々は彼を2、3秒観察するような眼で眺め

「ところでアルマンくん」

「いや、『くん』はやめてくれないか一応実習生とはいえ自分教師なんで」

「じゃあチキン野郎」

「はあ!?!」

脈絡ない悪意の呼称に驚くと苛立ちが同時に声となって出る。

「あら？確かあなた罵られるほど喜ぶって聞いてたんだけど・・・?」

「誰がそんな特殊性癖の持ち主だっつてんですか！誰ですそんな無責任な噂流したのは!」

「図書委員のダリアンちゃん」

あのクソガキ・・・と歯ぎしりするアルマンの正面の席へと勝手に腰を下ろし、

音々は「まあまあ」とひとまず形式美、落ち着かせようとする。

「あんまり彼女を怒らないであげて。多分クリスマスだから罵倒の内容も

時期に合わせたつもりだったのよ」

「全く持つていけないよその気遣い！」

あと罵倒だつて認識してて言つてたのか悪質極まりないなオイ！」
年下の女性相手に思わず殴りかかってしまいそうになる衝動をどうにか抑え込み、

アルマンも再び着席。

「で、話戻すけど・・・何か用？」

不貞腐れの感情をしみ出させた実習生の言葉。

「ええ。実は最近ちょっと訳あつて人生相談の聞き手なんかしてるんだけどー」

「・・・人生相談？」

思いがけない内容にアルマンの片眉が小さく上がる。

「そうなのー。でもなぜか相談者が最近来なくなつてー、
それでなんだかさつきから見たらあなたため息ばかりついて
幸薄そうな感じだつたし声をかけてみたんだけどー」

幸薄い、といえは心当たりがないわけではない・・・というか思い
つきりある。

今朝から延々半日近く鬱々として気分が晴れない原因は。

「いや実は・・・付き合つていた彼女にフラれまして・・・」

生徒に愚痴を聞いてもらうなんて情けないと思いつつ、

アルマンは内心に抱えた感情の吐き出し口を見逃すことはできなかつた。

.....

「・・・それでそのデートなんですけど・・・」

「もういいわー。あなたの悩みは大体わかったから」

話し始めるとなかなか止まらなくなつてアルマンを無理やり停止させ、

聞き手に従事していた音々が再び口を開いたのは

話の中盤に差し掛かる少し手前というところだった。

「え？いやここからが大切なんだけど・・・」

「要するにあれね？恋人と過ごすクリスマスに色々期待していたんだけど」

直前になつて一方的に別れ話を切り出されて、話し合う暇もなくバイバイされた、と」

会話の要所だけ抜き出し簡潔にまとめる音々。

「『恋人と過ごすクリスマス』に過剰な期待を抱いていたあなたは心のよりどころをどこに持っていたらわからなくなっている、とこんなところで会つてるかしら」

「はい・・・これ以上ないくらい正鵠を射てます・・・」

改めて他人の口から客観的な立場で聞かされるとますます情けない話だった。

今まで女性絡みのトラブルに巻き込まれたことは数知れず、命の危機にぶち当たったことも実際一度死んだことすらまである、ある意味女性経験豊富な男は

「ドヨン・・・」と暗いオトマノペを背景に目の虚ろ具合を一段と濃く重くしている。

だがそんな彼の肩へ音々はポン、と軽く手を置いて

「きつと大丈夫よー。悪いことと良いことは表裏一体なもの。

お酒でも飲んでるうちに良いことが舞い込んでくるわきつと」

はいどうぞ、と手渡されたグラスの中には

ほんのり若葉色に色づいた透明な液体が満たされている。

「？さつきまでここにあつた芋焼酎は？」

「あああれならもうほとんど空になってたし別のお酒持ってきたの。ほら嫌なことはひとまず飲んで忘れて」

本来なら酒を持ち込んだ生徒は叱るのが教師の責務だろうが、色々と心に傷を負ってしまっている今のアルマンにそこまでの気勢は回復しておらず。

「ん……」

渡されるがまま口内へと呷った液体が喉を潤す感覚だけが傷を塞いでくれる。

そんな錯覚を青年が感じるのも無理はなかった。

プルルルル……プルルルル……

「んあ……？」

覚醒の音は聞きなれた電子音。寝ぼけ目まなこを擦り

ぼやけるどこかよく分からない視界でもとりあえず慣れ、

傍らで騒ぐ携帯を手を取ったアルマンは通話ボタンを押すとそれを耳に当てる。

「ふあいもしもし……どちらさ……」

「アルマン……私よ」

「！た、たた、ターリア?!」

電話越しの声に急激に意識を覚醒させるアルマン。

通話の相手　ターリアこそクリスマス・イブのその朝に一方的に別れを言い渡した

アルマン最新の恋人にして最新の元カノだった。そんな彼女は電話回線越しでもはっきり分かるほど憂いを帯びた声を震わせて

「ごめんなさいアルマン……今朝の話、あれはなかったことにして……」

「え？」

あまりに簡単に、破局の放棄を宣言してきた。

「私が全部悪かったの。今日一日かけて考え直してみたわ。それで分かったの、やっぱり私には……あなたが必要なの」

「ターリア……」

この感情をいつたい何に分類したらいいのか、今のアルマンには考えを巡らすこともできなかった。

ただ先ほどまで どのくらい眠ってしまったのか分からないが 自分の精神に

重くのしかかっていた石の霧が晴れたような嬉しさの波だけが彼の中にある。

「ターリア、今から会えるかな……」

その感情を押さえつけていたくなくて、決意の響きが電波に乗って飛んで行く……

「あの……小揺木先輩、あの人がどうかしたんですか……？」

大原杏あんのそんな怖がるような声音もしかし普通に

「なんでもないのー」の一言でスルーして、音々は「はい」と一通の茶封筒を彼女に手渡す。

その表をまず見て、次に裏も見て杏の頭上に小さく『？』のマークが浮かぶ。

「？これ……私の父宛て、ですか？」

裏面にボールペンで書かれた見慣れた名前は杏の父親のそれ。

一体どんな接点か、と首をひねる杏の疑問を察したようで、音々は「お父様によりしく伝えてほしいの。用意してもらったお酒のお陰でモルモットに上手く薬を飲ませられましたー、って」

謎かけのような言葉。当然余計に困惑するしかない杏の視線の先では机に突っ伏したまま、

壊れたラジオのように一定のリズムで笑っている男の姿が。

「……やっぱりこの薬の副作用は強すぎるわねー。

三日三晩幸せな夢から覚めなくなるだけなんて使い道が思いつかないわー」

自分だけに聞こえる声量で呟いた音々の手の中には2つの小瓶。

その中でカラカラと音を立てる“楽園の欠片”と

パラダイス・ピース

”と

それを利用したオリジナルの錠剤を細めた眼で眺め、

少女は短くマッドサイエンティストの溜息を吐くのだった。

SS バンドやうじせー！(前書き)

受けがいいのか悪いのか・・・セリフオンリー第2弾！

SS バンドやろっせー!

鳴々葉「あの、そんなわけで今日はバンドの練習をすることになったんですけど・・・」

羽々姫「は？バンドって音楽の？」

沙々羅「唐突だな。どっかの音楽レベルからキャラソンCDのオフアーでも・・・」

つておいこの一連の会話どっかでやったぞつい最近」

音々「今月の文庫MAGAZINEの冒頭部分そのまま使ってるわね。」

原作の編集部辺りに訴えられないといいんだけど」

羽「さりと怖いこと言わないでくださいよ・・・」

鳴「編集者の人とかがこの小説を見てないことを祈ります・・・
つてそうじゃなくてバンドですよバンド!

文化祭でのシユラウド部の出し物の『バンド生演奏』の練習ですよ。
この前話し合いましたよね?」

音「?そんなことあったかしら?」

沙「私も記憶にねーぞ。どうせ今月のMAGAZINE読んで

ここの作者が突発的に思いついたネタだろ。迷惑な」

鳴「いえ実はネタというか話の方向性自体はわりと以前に出来てたらしいんですけど・・・」

その、書く気が起きなかったらしくて・・・」

羽「基本的に欲望のまま動くタイプですからねここの作者。

尊敬する人物が某ファンデーションのハッピーでバースデーな会長と

いつもニコニコあなたの隣に這いよる混沌ですから」

音「なるほどね。それが今月の話読んで、

タイミング良いと勘違いして出した、つてところかしら」

鳴「おおむねそんな感じですよ」

沙「・・・まあ1回くらいは大目に見てやるか」

羽「気前いいですね」

音「12月にやっと文庫化で世間に広く出れるから喜んでるのよ。

ほら、沙々羅って大勢に見られると興奮する性質タチだから」

沙「ねーよそんな性癖設定勝手に作んな！文庫売れなくなるだろ！」

羽「文庫が売れたら・・・私の借金も少しは減るかな・・・」

鳴「いや、いくらなんでも印税が私たちの所に入ってくる可能性は・・・」

「いい加減にしるお前らああ！！」

羽・沙・鳴・音『（ビクウ！！）』

加賀篝「コーチと呼ばれたからわざわざヨーロッパツアーの最中だというのに

帰国してみれば・・・」

羽「いやあの・・・えつと・・・」

沙「落ち着けよ加賀さん、時差ボケで苛立ってるんのか？」

加「中途半端なところで止めるな誰だか分らなくなるだろ！時差ボケ？

そんなものが気になるくらいならまだ良かったんだろうがなあ

！！」

鳴「ま、待って下さいませんこつちが一方的に悪かったです！

だからその鎖はさつさとしまってくださいお願いです！」

加「ちつ・・・」ロードナイト“薔薇輝”収納

音「苛立ち過ぎてキャラ崩壊が始まってきてるわねー」

加「誰のせいだ誰の・・・で、具体的にどんなことを習いたいんだ？」

鳴「え、えつと・・・具体的には上達のコツとか・・・」

沙「文庫の売上を伸ばす方法」

羽「文庫の印税収入が私の口座に入るようにする方法」

音「アニメ化されたときに良い製作会社に巡り合う方法」

加「・・・よしわかった。特別な助っ人を呼んでやるう」

プルルルル・・・ 携帯操作&どっかに連絡

加「ああ俺だ。急に悪い・・・うん、うん・・・そ、じゃすぐ来てくれ」

ピツ！ 通話切る

加「すぐ来るそうだ」

鳴「あの一休全体だれを呼んで・・・」

ガラリ

????「来たわ、タカヤ」

羽・沙・鳴・音『?誰?』

加「俺の音楽仲間の一人。家が割とこの近所なんでこうして来てもらったわけさ」

????「ここなら好きだけ演奏していいと言われたから」

羽「いやそれはとつても有難いですけど・・・失礼ですけど楽器は?」

????「ちゃんと持ってきているわ。これ」

沙「?これ・・・ってヴァイオリンじゃねえか。バンド練習って言うってんだろ?」

音「でも最近は音楽分野の融合も進んでいるし、意外といいかもしれないわよ」

鳴「確かにオーケストラと和楽器のコラボとか見たことありますね」

加「じゃあ俺は帰るけど・・・まあ頑張ってくれ」

沙「なんだあいつ?頑張れって、そりゃやることはやるつもりだけど」

よってうお?!「」

愉快的ブラザーズ 過激なシスターズ

「ふああ・・・おはよ・・・う？」

徹夜明けの霞み目にはいささかきつい朝の太陽光線に何とか抗いつつ登校した

藍羽浅葱あいはあひぎが教室の扉を開くと、出迎えたのは

何やらギクシャクしたようなあまり心地よいとは言えない気配。

微かだが確実に室内を満たしつつあるその発生源へと目をやれば、

とある一人の生徒の席を囲むようにして数人の女子たちが

ひそひそと困ったような怯えたような表情でしきりに言葉を交わし合っている。

「？なんかあったの？」

「あ、藍羽さん・・・」

気になってかけた声に返してきたのは囲まれていた一人 嵩月奏
いつもどこかおっとりとした印象を周囲に与える彼女の瞳には困惑の色がありありと浮かび、

それにつられるように話でも聞いていたのだろう周囲の女性陣も表情を硬くする。

その内の一人が

「なんかカツアゲ？されかけたんだって。カナちゃんの知り合いの子が」

短くも適切に状況説明を場に放り込む。

「カツアゲ？・・・って人脅してお金奪うアレ？」

「はい。不幸中の幸いというかその子はなんとかその場から走って逃げきれたそうなんですが・・・」

「最近被害多いみたいだね、若い女性ばかり狙ったカツアゲ事件」
嵩月の言葉を補足する形で告げられた言葉に浅葱は浅く記憶を巡らせる。

そう言えばここ最近、この辺り一帯でその手の犯罪の被害が増加傾

向にあると

何かの記事で見た記憶があった。一応金銭以外の被害は今のところないものの

警察としてはパトロール時間の延長やそこへ投入する

人員の増員など対策も取り始めている、というのはそう言えば一昨日の夜

見ていたドラマのCM中にヒマつぶしがてらハッキングした

地元警察署の捜査資料データに書いてあったわけ。などと思いだすも、

もちろんそんな余計な情報の出所まで口外する必要は今の浅葱には全然なくて。

「あーそう言えばあったわねそんな事件。

まったく、男3人で寄ってたかつて女路地に追い込んだ拳銃、武器ちらかせて金奪うとかホント最低ね、その犯人」

「あれ？もうそこまで詳しく話したっけ・・・？」

首を傾げる一同に、だが浅葱は顔色一つ変えず「ニュースでやってたのよ」とさらりと返すだけ。

犯人の数から犯行方法までももちろん情報ソースは警察の内部資料なわけだが、

この場の会話においては本当の本当にどうでもいい些事なのでわざわざ浅葱は口にしない。

「でも・・・そうね、知り合いの知り合いが被害に遭ったまま、つてのも

なんか癩へまじよね・・・」

言って数秒、何やら思案するようにしていた彼女は制服からスマートフォンを取り出すと

登録してあったらしい番号へコール、一拍の間も開けずに相手へと通話が繋がる。

『よう嬢ちゃんどうしたい？こんな時間から呼び出して
ネットワークの向こうから返ってきた声は電子的な響き。』

機械的に合成されたその声の主はとある島一つを管理する

5基のスーパーコンピュータたる人工知能。浅葱が付けた名は「モグワイ、三雲学園周辺30キロ圏内に存在する

ネットワークに接続した監視カメラの映像全てと顔認証システム、あと警察の捜査資料の情報リンクさせて今から

言う人物の映った映像をピックアップして。制限時間は15分よ」朝のHRまでの残り時間からの過剰労働の気を放つ宣告に、

モグワイは「ああ？」と人間くさく聞き返す。

「おいおい、朝っぱらからまったく脈絡もねえ話持ってくるなあ」

「あんたなら十分可能でしょ」

「そりゃあそうだけどよ」

「ならちやっちゃんとやんなさい」

へいへい相変わらず人使いが荒いこつて。と

どこか愉しそうにそう愚痴をこぼすモグワイに浅葱は

記憶していたカツアゲグループのメンバーの名を指折り挙げていく。

すっかり汚れきった灰色のビル壁が両側にそそり立ち、後方は高い塀が逃げ場を塞いでいる。

いまどき漫画でも見かけないような典型的な袋小路の奥へと得物を追いつめ、

3人の男たちは狂ったように輝く視線を前方へと向ける。

ヒヒッ！と下卑た笑いを漏らす一人の男が握るのは大振りのナイフ。残る二人も手にそれぞれ刃物を構え、狩りを楽しむ狂犬じみた昏い笑みを湛えている。

追い詰められているのは2人の年若い女性。黒の長髪を怯えに揺らす制服姿の少女と

ロリ系のふわふわしたドレスで着飾った少し年上の女性という取り合わせ。

逃げ場がなくなつたことを悟つたらしい彼女たちへ男の中の一人が歩み寄つた。

驚くほど美しい顔立ちのその男の口元に浮かぶ微笑はしかし女性を魅了するような優しいものなどでは決してない、ただひたすらに怖気と戦慄だけを呼び起こさせる絶望の具現。その唇がゆつくりと形を変え、何かの音を紡ごうとする。精巧な人形を思い起こさせる、人外じみた影の喉仏が動き

「有り金全部置いて逃げるか、それともここで殺されるか。好きな方を選べ」

冷酷な宣告とほぼ同時、男の袖口から飛び出した金属色の何か少女たちの間を通り抜け後方の壁へと突き刺さる。

「ひっ……」

思わず短い悲鳴をあげ黒髪の少女が目をやつた先には一本のナイフ。刃渡り20センチ以上は確実に有りそうな凶悪な業物わざものが刃はおろか柄の半分辺りまで壁を貫通している。やっていることは道化師の投げナイフと変わらないが

そこに注がれた力と技術は決して遊戯や余興の為のものではない。そこに宿っているのは淀みきつた故に純粹な、逆説的な悪意の芳香だけ。

（相変わらず綺麗な顔して容赦ねえなあアニキも……）

ククツ、と後方に控えていた男の片方が堪えるように喉を鳴らす。そのまま隣で無言の威圧感を放ち続けている弟分へと目をやり、最後に標的へと目のやり場を一周させ戻す。

刑務所の中で初めて知り合つてから約半年、共に脱獄してこの商売を始めからでもまだ2ヶ月ほどしか経過していないが、彼らトリオの名前は収監以前の個々の知名度も相まって

このところ裏社会でもそれなりに有名になりつつある。勿論カツアゲ程度ではその悪名の上限もたかが知れているが、いずれはもつと凶悪犯罪にも手を伸ばして昔の黒い栄光をもう一度・・・な

どと男が身勝手な誇大妄想を始めた時だった。

ビュン！

「っ！？」

後上方から飛来する風切の音に気付き、反射的に男は身をよじる。

「ヒツ?!」

同様の反応を示した弟分の挙げる声に数歩分だけ前にいた長兄役は振り返り、足元に穿たれた弾丸大の穴を見つけ眉をひそめた。

「なんだ？警察・・・にしては少し過激すぎるな」

あくまで冷静に言つて、長兄はダラリと腕を降ろす。

スツ・・・とその袖口から滑るように現れた銀色のナイフを軽く指先で挟み一回転、

しっかりと手中に構え直すと彼は少女たちとの距離を一気に詰めた。

「あつ・・・」

「声を出すなよ？」

耳元に息がかかってしまいそうな距離、芝居じみた口調で言つと男は空いていた方の手を伸ばし

壁に突き刺さつたままだったナイフを抜き取る。

そのまま2本のナイフを少女たちの首筋へと移動させる。

人質、という単語が黒髪の少女の脳裏に踊る。

「今俺たちを狙った狙撃手、姿を見せろ。」

さもないと俺たちの罪状に殺人が二人分追加されることになるぞ」
他人事のように言う男は心底愉しいといったように嗤わらった。

毒蛇を連想させるような哄笑に耐えられなくなったように、

一つの影が袋小路に面したビルの窓から姿を現した。

サイレンサー

消音機を先端に取り付けた漆黒の長銃を構えた、それは一人の女性。
全身を覆うように黒いコート^{サイレンサー}を羽織った、モデルのように整ったス
タイルと顔立ちの少女だ。

残念そうに唇の端を歪めた彼女は窓から身を乗り出したかと思うと
そのまま一瞬のためらいもなくそこから下に跳躍、ビル4階分の落
下を

まるで感じさせない身軽さで着地するとそのままつすぐに銃口を
両手ナイフの男へと向け、

引き金に指をかけた形で停止する。

「おとなしくしなさい、寄せ集めの犯罪者トリオ。もう一度ブタ箱
に放り込んであげるわ」

「ありきたりな言葉だが、それはこっちのセリフ、というほかない
な。」

この子たちが見えないのかい？」

挑発に挑発で返す男の両サイドでは少女がそれぞれ弟分たちに背後
から羽交絞めにされていた。

必死にもがいている様子だったが腕力の差は歴然で、ちよつとやそ
つとでは抜け出せそうにない。

「最低な手ね」

「でも有効な手だろう。さて、君がどこの誰だかは知らないがちよ
つと道を開けてくれないかい？」

僕たちはただこの子たちからお金を巻き上げようとしただけ。

それ以上のことをするつもりは今のところないんだよ」

「はっ、残念！目の前のムカつく行為を見逃せるほど、私も人間で
きてないのよ！」

言うが早いか少女　黒崎朱湮はコートの中から何かを取り出し軽く投擲。

それが暴徒鎮圧などに用いられる閃光弾の類と見抜いた瞬間、男たちの視界を白い光が焼く。

「つく！非殺傷とはいえ人質がいる所で使う手か・・・！」

目を眇め、なんとか行動不能を回避した長兄の視覚が

「?!なっ?」

すぐ手元の意外な光景を認識する。必死に目をつぶる弟分二人、その腕の中に納まっている二人の少女の目のあたりがなぜか黒く見える。

「サ、サングラス・・・?」

場違いに間抜けな声を上げた刹那、

「「御名答!」」

「ぬあっ?!」「ヒイツ?」

力が緩んだ隙をつき少女たちが拘束から脱出、そのままダッシュで朱湮の方へと逃げて行く。

「に、逃がさぬあああ!???」

事態に気付き追いかけてようとした長兄の顔面に今度はフワリ、なにか軽く柔らかい物が舞い降りてきた。怒り任せに掴み上げるとそれは

黒い糸状の物が無数にまとわりついた・・・

「カ、カツラ!?お前らまさか・・・」

全ては予定されていたこいつらの作戦。自分達は上手いこと踊らさ

れていただけ。

騙されていたことを一瞬で悟った男の目の前、朱湊の傍らに立った女子の制服姿の少年はバツが悪そうに額に手を当てて

「朱湊さん酷いですよ・・・追い詰められたら

すぐに助けてくれるって言うてたじゃないですか・・・」

非難の視線と言葉を先輩へと送るが

「別に怪我したわけでもないんだしいいじゃない。

それに『多少危険な内容でもいいからバイト紹介してください!』って頼んできたのは

トモハルの方じゃない」

「そりゃそうなんですけど流石に女装は・・・」

「まあ過ぎたことをぶつぶつ言うのもみつともねえぜナツメ」

「そしてあんたはなんでそんな無駄にノリがいいんですかギャヴィ先輩・・・」

ドレスの少女ことギャヴィンストーン二世ジュニア(三雲学園OB)に

疲れた口調でツツコンでやっている間に、いつの間にか周囲に人の気配が増えている。

閃光弾の影響から回復してきたトリオが身をこわばらせるその周囲のビルの屋上から

彼らを取り囲むように在るのは十人以上はいるだろう、

全員が朱湊や智春と同じくらいの世代の少女たちだ。

手に手に武装した彼らを代表するように、哀れな加害者たちの正面に立つ朱湊が告げる。

「じゃあみんな・・・女の敵はサクツと蹴散らしちゃいましょうか

」

刹那、男3人だけを置いた狭い路地に銃弾が、剣撃が、魔力の奔流が雪崩のように一気に押し寄せた。

『あーあーあんなによつてたかつてフルボッコにしちまって・・・生きてんのか、あいつら？』

複数のモニターが設置された部屋の中、

今回の一連の作戦行動の指揮を終え最後の後始末を

一人観察していた浅葱にモグワイは訊ねるが。

「一応手加減はするよう言ってるから、多分平気よ。

そもそもこれくらいで死ぬようなタマじゃないし、あの脱獄トリオはね」

プリントアウトした刑務所の収監犯罪者リストを丸め、彼女は無造作にゴミ箱へと放り込む。

「フリーと組織所属の殺し屋が二人に連続殺人鬼が一人、

おまけに一人は『不死身』って噂まで流れてたくらいだしちよつと痛めつけたくらい平気よ、きつと」

「多分」とか「きつと」とかさつきから推測の域を出てねえな、という言葉は

しかし思考回路の中だけに留め、モグワイは再びモニター越しにリアルタイム中継されている

三雲学園女子連合によるヴァーチャー・ノス・デイフリングへの

過激なリンチを面白そうに観戦するのだった。

愉快的ブラザーズ 過激なシスターズ（後書き）

浅葱さん 書きにくい

モグワイ 書きやすい

書く前からなんとなく分かってましたがストブラキャラはまだ自分の中で掴みきれてない部分が多いです。

モグワイは結構やりやすいんですけどなんででしょうね？

シスコンプレイヤー

闇を薄ぼんやりと照らしたすのは幾つもの篝火の放つ橙色の灯り。
時刻は深夜丑三つ時、旧校舎の裏庭という

人目につかないにも程がある場所に集まった少女達は

そのほとんどが困惑しているような表情を浮かべている。

彼女たちの視線が集まるのは円状に設置された篝火の内側、

同じく城の縁で地面に円を描いたそれはどう鼻^{ひいきめ}肩^{かた}目に見ても魔法陣、

しかも異様に細かい図案^{パターン}で構成された見るからに曰くありげな代物
だった。

「ねえ羽々姫ちゃん、もう止めないこんなこと・・・なんか雰囲気
が怖いよ・・・」

傍らの同僚の袖にしがみ付き言う鳴々葉の声は思い切り震え、目許
には涙があふれだしてきている。

しかしそんな彼女の様子に「よしよし・・・」と慰めるような視線
こそ送ったものの

羽々姫は実にあっけらかんとした様子で

「いや経験したことはないからわかんないけど、祈祷の儀式なんてど
こもこんな感じじゃないの？」

山羊の頭骨被った黒マントとかいらないだけマシだと思うけど」

「それ祈祷じゃなくてただの黒魔術だと思う・・・」

「どっちも似たようなもんよ」

うう。と完全弱気モードの鳴々葉はこの友人が頼れないことを悟る
と今度は反対側、

少しだけうとうとしかけている雪菜へとすがりつく。

「雪菜ちゃん・・・」

「先輩泣かないでください。正直私もこの状況は受け入れきれてな
いです・・・」

精神的な疲労をにじませたその声を遮るように、パンパンと手を打

つ乾いた音が場に響いた。

音の方に集まる視線。目を向けると魔法陣の中心にいつの間にか二人の少女が佇んでいた。

一人は巫女装束の嵩月奏。

もう一人は物騒そうな長剣を気だるげに肩に担いだポニーテールの少女

きりしまがよむか
煌坂紗矢華。

「……こんな時間にこんな案件で、よくこれだけ人を集められたものね……」

ここにいない誰かに向けた煌坂のその言葉に周囲を囲んでいた少女たちの一部から

クスクスと笑いがこぼれる。

「掴めるところにあるのに大金に手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔するじゃないですか。」

だから手を伸ばすんです……!」

一人だけ某政治家の息子みたいなこと言ってる準守銭奴の元アイドル（貧乳）もいたが、

大体の者は少しだけリラックスしたように場の気配を緩める。

「って誰が貧乳だ!？」

「?羽々姫、誰に怒ってんだ?」

「沙々羅そこはスルーしなきゃダメよー。羽々姫ちゃんも現実を見ないといけないけどー」

「うっさいですよそっちの話題こそスルーしてください!」

「はあく大きいと肩がこってしょうがないのよねー」

「わざとだろ!絶対わざとだろその唐突な『巨乳キャラあるある』!」

コンプレックスを引き合いに出されわめく羽々姫と素なのか策謀なのか挑発しまくる音々。

そんな二人のやりとりを片隅に置きつつ、奏と沙矢華はテキパキと集まった面々へ指示を出していくのだった。

「はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……ね、ねえ鳴々葉？」

「ふう……な、なに羽々姫ちゃん？」

「もう私らの番になって20分くらい……経つよね……？」

「ううん、まだ10分くらい……」

「マジですか……」

疲労困憊で息切れしまくり、魔法陣を囲むように

延々創作ダンスのような奇妙な動きをしていた二人は動きをとりあえず継続はしつつも、

しかし精神の方は全く伴わず苦しそうに言葉を放り合う。

「ほら頑張んなさいよ二人とも！。へばるの早いわよ仮にも傭兵でしよあんだ達ー？」

叱咤激励する沙矢華に多分の殺意を覚えつつ、

羽々姫はしかし『金のため、金のため……』とある意味無心の境地で踊り狂い続ける。

周りを見れば二人より先の順番で踊っていたコンビ達はみなグロッキー状態、

あちらこちらで服が汚れるのもいとわず地面に倒れ伏している。

「報酬……報酬……借金返済……」

「は、羽々姫ちゃん……」

歯を食いしばり体力振り絞りで腕を、腰を、足を動かし続ける友人の姿に

思わず口をつぐむ鳴々葉。かくいう見ている彼女自身同じ動きをやっているわけだが

あえてそこは無視することにする。

「はあはあ……つてかさあ、よく考えなくても……」

私たちつてここで言う意味の『巫女』じゃないじゃん……これ意味あんのかな……」

「凄い今更言わないで、くじけそうになるから・・・」

三雲学園の校内放送でその『御触れ』が出されたのは一昨日の放課後、

下校のアナウンスをする校内放送の真つただ中だった。

「・・・と、今日はここで理事長からのバイトのお知らせです」

『?バイト』

時間帯が時間帯だけに全校生徒が聞くわけでない放課後放送、スピーカーの向こうで「コホン」と放送部の少女が咳ばらい一つして「え〜唐突ですが理事長からのメッセージをお伝えします。

『うちの学校に所属する巫女さんは明後日の晩、

旧校舎の裏庭で大規模な祈祷やるから集まってください。

一応は自由参加だけど。ちなみに報酬は一人50万』」

「50万?!?」

法外な報酬に目を丸くする生徒ども。特に金に目がない連中の動きは激しく、

毎度おなじみ六夏に至っては「明後日の晩まで巫女の修行してくるわ!」とか言って

飛び出していこうとする始末。

結局「ちなみにコスプレとかのなんちゃって巫女さんはダメだそうです」という

補足説明が入るまでの数分間、校門前で六夏VS真日和&ヴィヴィアンの

火花散る攻防が繰り広げられたりしたわけだが、

今回の話とはあんまり関係ないので割愛することにする。

「それにしても理事長も私的なことに学生使うなって話よね・・・世話になつてる知り合いの運氣回復させたいからって公私混同にも程があるわよ！」

「腹立てても動きに全くブレがないよ羽々姫ちゃん・・・」

もう15分ほど踊り続けているこれは指導役だという沙矢華と奏曰く『運氣を回復させる踊り』なのだそうだ。胡散臭いことこの上ない。二人コンビで踊り続けるだけというシンプルながらもベリーハードなこれは

見かけ以上にやってみると地獄、巫女属性持ちとはいえ普段鍛えていない

名もなきモブキャラたちにはかなり、戦闘経験のある羽々姫らにとつてもかなり堪えるものだった。

「・・・というか・・・さ、沙矢華さん。これいつまで続ければいいの・・・？」

「えっ？そりゃ効果が出るまでだけど？」

「どこの雨乞いの儀式?!」

「ああ！と怒り爆発した羽々姫は聖衣エンジュウの能力もなしに

クロックアップ並みの速度で沙矢華に接近するとその胸倉を乱暴に掴む。と、そこへ

「ただいまー。頼まれた買い物してきたわよー」

「？買い物？」

いつの間にか姿を消していた音々の姿を鳴々葉が認める。

その手の中のビニール袋には某大手コンビニチェーンのロゴが印刷され・・・

「はい奏さん、頼まれた豚の生首」

「グロいグロいグロいです先輩！ちょ、出さないでくださいよ

嵩月さんも普通に受け取らないで！というかビニール袋から

既に赤い何かとが滴り落ちてますけど!？」

「新鮮殺りたてだからー」

「あきらかにルビおかしいですよ!? 命タマとつたんですかああそうですか!」

向き直った羽々姫が鳴々葉に加勢に入る。

もはや馬鹿馬鹿しいことしかなくて踊りは放棄らしかった。

「いいか羽々姫。人つてのは他の生き物の命を喰って生きてるんだ。食材にいちいち文句言う奴はもう今後一切何も喰うな」

「言ってることは正論っばいですけどこの状況じゃやっぱり場の空気読んでませんよね」

「ああ違つんです皆さん。これは食べるんじゃなくて供物の代わりに・・・」

一応訂正しようと声をかける奏だったが、ヒートアップし始めた口喧嘩は

もう加速度着いて止められなくて。と、その時だ。

「あ、ヤバい」

「えっ?」

沙矢華の呟きに一瞬、聞こえた全員が動きを停止した。

強張った沙矢華の視線を追うと先までその周囲を

グルグルと少女たちが踊り続けていた魔法陣の中央から黒い靄のようなものが発生している。

「まずいわね。儀式を途中で放置したから術が暴走してるわ・・・」

「どこまでもタチ悪っ!」

ツッコむ羽々姫の前でその気体は徐々に形を変えていく。

膨張し凝縮し、再び膨張し凝縮しを繰り返す様子は

卵生生物の胎動にも似た生命の質感が確かにあつて。

「な、なにあれ・・・」

「さあ? さしずめ低俗な霊体の寄せ集まったものとかかしら?

いわゆるコツクリさんとかの類よ。きつと呪力に呼ばれて召喚されちゃったのね」

「そうしてそんなに冷静なんですか!」

怒鳴りはしたものの、もしかしたらこの娘はこんな正体不明の存在

なんて

軽くどうかできるのかもしれない。そんな風に思った羽々姫へと沙矢華は強気な笑顔を見せて

「私の雪菜に被害が及ばなければなんの問題もないわ！」

「このシスコン巫女おおおおお!!!」

最低だった。

周囲の状況ガン無視で特定の個人だけ助けられればいいと思ってるあたりかなり残念な人だった。

「そ、そうだその姫終さん！あの人の槍なら確か魔力的なもの打ち消せるはず・・・!」

名案とばかりに声を大にして言った鳴々葉。「その手があった！」と周りからも称賛の声上がるが。

「えっ？あの子ならもうとっくに帰らせたわよ？疲れてるみたいだったし」

『もうお前一人で何とかしろよこのシスターコンプレックスうううう!!!!!!!!!』

『ウヴオオオオオオオオ!!!!!!』

少女たちのシャウトがこだました瞬間、闇を突き抜け巨大な異形が空へと舞い上がった。

シスコンプレイヤー（後書き）

沙矢華さん 残念超残念w

バーズさんの運氣回復を祈って

授業を終えた教師と入れ違いに教室へと入ってきたその少女の姿を捉え、

教室の中に小さくざわめきのような波が起こった。

扉を開けたまま微動だにしない彼女はしかしそんな好奇の視線も全く意に介した様子も見せず軽い足音と共に室内へと歩を進める。彼女が動くたびに衆人の目はそこへと自然集まっていくな。

無表情な顔立ちには非現実的なまでに整い、藍色の髪が小さく揺れる。そんな可憐、と形容するに異論ない少女はある席の前で足を止めた。その席に座した少年　夏目智春は自分をまつすぐ見つめてくる少女の視線に

気付き小さく首を傾げる。そんな彼へ

「要請。夏目智春、私に仕事を紹介していただけませんか？」

「……は？」

少女　アスタルテの口から発せられた意外すぎるそんな言葉に智春だけでなく後ろに浮かんでいた幼馴染までもがシンク口して聞き返していた。

「なるほどね……よっし！そういうことなら協力しましょう！」
時間は少し飛んで放課後のシュラウド部部室、
ちよつとした相談にやってきた智春達の話聞いた羽々姫は即効でその内容に快諾してくれた。

「ありがとうございます。天乃羽々姫」

丁寧な頭を下げるアスタルテ。そんな彼女に操緒も『良かったね』と祝福している。

「別にそんな感謝されることでもないんだけどね。こっちも人手は欲しいし」

「それでも十分ありがたいよ。正直羽々姫がダメだったら次は危険覚悟で六夏会長あたりにも相談しに行くところだったし」

「あの人の紹介する仕事はヤバいのも多いしね。特に夏目やそっちの子みたいなのは」

「多少危険な仕事でも生還率高いからどんどんそっちに回すし」

「マグロ漁船に乗れとか地雷撤去しろとかロクでもない仕事ばかり出してきそうだもんなあ・・・」

「まあ六夏会長だから」

「親しげに話す智春と羽々姫。この二人、実はアルバイト仲間だったりするわけで」

「何気に結構仲が良かったりする。経済状況のひっ迫具合そのものに關しては」

「天と地ほどの差があるわけだが、互いに割の良いバイトの情報や節約術を教え合っているうちに」

「なんとなくシンパシーが生まれたらしく、」

「今ではこうして互いの部室に軽く顔を出すくらいの仲には発展していた。」

「えつとそれで肝心の時給だけど、これくらいで間に合うよね？」

「バイト情報がまとめられた書類の一点、給与情報の欄を指さす羽々姫にアスタルテは」

「肯定」とだけ返す。確認した羽々姫は「あんたも？」という風に視線だけ智春へと向ける。彼は頷いて

「必要はないと思うけどとりあえず保護者って感じで参加するよ。」

「報酬もそれなりの仕事みただし、安全策は幾つも取った方がいいだろ？」

「この手の仕事の基本だね。でも夏目の場合、逆にこの子の足を引っ張ったりするんじゃない？」

「真顔で言うなよせめて冗談めかせよ。結構傷ついたぞ」

「はいはいどうもすいません・・・じゃ早速申込みしてくるね」

「こんな仕事でも倍率高くてね、と言って立ち上がると彼女は扉で隔

てられた隣の部屋へと姿を消す。

いつか聞いた話によると彼女曰く『いつも優遇してくれるバイト紹介屋のおっちゃん』とやらに

電話で連絡をとっているらしい。余程特殊な事情の持ち主なのか連絡手段は固定電話に限られ受話器向こうからの声は電子合成、BGMには毎度発砲音と爆発音が多重奏を奏でているという、何やら分からないが素敵そうなおじ様だ。

「それでも紹介された仕事はまだマトモな部類だったし、文句は言えないけど……」

『?どうかした?』

「いや、なんでもない。ただの独り言」

納得してないと表情で雄弁に語る幼馴染をだが華麗にスルし、智春は傍らに腰かけたアスタルテへと目をやる。

机の上に置きっぱなしにされた書類を眺める水色の瞳。

そこに見えたほんの僅かの揺らぎをしかし彼は見逃さない。

「……心配ないって」

「?」

かけられた言葉の意味を察せなかったのか、アスタルテは智春を見上げてきた。

小柄な少女にはいささか不釣り合いなほど情動を読めない両眼に、今だけは素直な問い掛けの色が混じっている。

「というより、今から心配しても無駄、って言った方がいいのかな。ただどうしても叶えたい目標がちゃんと見えてるなら、

なりふり構わずそれに向かって全力を尽くせばいい。そういうもんだと思うよ、僕は」

言って、智春はそつとアスタルテの頭を撫でてやる。

いつの間にかやら子猫のように彼へと寄り添いながら、

彼女は「目標……」と自分にだけ聞こえる声で呟いた。

不安定に揺れ続ける足元ははつきりと水に濡れ、智春は必死の形相で右腕と腰に結んだロープで全身の体重を支えている。

はるか遠くに目を向ければ広がる色は延々青、蒼、藍……空との境目を示す水平線が全方位を囲み、周囲には島影どころか漂流物の一つも見当たらない。

『トモー！？何チンタラやってんだって親方がー！』

「分かってるよ！分かってるけどアルバイトの素人にそこまで求められても正直困るね！」

操舵室の扉を抜け寄ってきた幼馴染に罵倒の勢いで返しつつ、彼はじりじりと慎重な足取りで船尾の方へと移動していく。

今回珍しく『ハズレ』だ。

言い渡された勤務地へと赴いた間に閃いた彼の直感は一切ぶれることなく今の現状を予測していた。

下宿からバスに揺られること数十分、辿りついた港の片隅で待っているのは

年季が入った一隻の小型漁船、そしてその甲板でハードボイルドに葉巻をくわえた

グラサン漁師 葉亜怒歩異留土之介37歳（独身）。

今回智春たちが受けた仕事の依頼主だった。

仕事内容の詳しい説明もされず、促されるまま乗り込んだ彼らを乗せた漁船は

前触れもなしに急発進、海上移動の乗り物では普通味わえない（味わっちゃいけない）ような

凄まじい横G連発の蛇行運転で気付けばどことも知れぬ海の中、真ん中、

アルバイトたちはそこまで来てようやく今回の仕事が漁の手伝いと教えられたのだった。

「うえっぶ……お、おーいアスタルター？ぶ、無事かー？」

波の揺れに起因する吐き気を何とかこらえつつ、

彼は船後方での仕事を担当しているはずの少女へと声をかけた。

いくら人工生命体とはいってもこの状況は流石にキツイのではない
か、

という彼の心配をよそに

「肯定。現状身体活動、及び生命活動に必要な以上の影響を及ぼす可能性のある事象は存在しません」

涼しい顔で応え、そのまま眉一つ動かさず手元のレバーを後方に倒す。

ザパア・・・と何かが海上から浮かび上がる音に続きガシャリ、と金属の擦れ合うような音。

船体にひっかけるように設置されていた巨大なカゴがその中身を船の内側へとぶちまける。

「うわ、けっこう一気に取れるんだなこういうのって」

そこに現れた光景に智春は小さく感嘆の声を上げた。

アスタルテの操作により海中から引き揚げられたカゴの中に入っていたのは

真っ赤な甲殻を不規則に揺らし、両手のハサミを頭上に掲げている無数のカニ。

カゴからはみ出んばかりに密集満載されたそれは数百か数千か、目測ではおよそ測りきれないほどの多量のカニが自己主張するかのように身をよじらせていた。

『うわぁ〜大量じゃん！高級食材って言っても実際目の前にこれだけいるとその価値が不思議だよね』

「希少価値ってそんなもんだろ。数が少ないから欲しがる人も増えるし値段も上がる。」

需要と供給のバランスってやつ」

指を挟まれぬよう注意しながら智春は隣に腰かけたアスタルテと共にカニを一つ一つ、

大まかなサイズを確認してはプラスチック製の箱に入れていく。

この箱一つが満杯になったところで大量の氷をぶっかけ蓋をして固定、を繰り返す

最終的に港へ戻って中間業者に引き渡すまでが今回の彼らのお仕事だった。

同じ漁業系の仕事とはいえ先日智春が想像した遠洋マグロ漁船一本釣りのなそれに比べれば

海域は陸に近いし、獲物も魚よりは幾分動きの緩慢な力二なので多少困難度は下がる。

ただ重労働だということには変わりないし、

それが小柄な女の子に課せられたものだとしたらはつきり言って労働基準法に喧嘩売ってるようなものである。

しかし当のアスタルテはこの仕事の内容を聞いてから嫌な顔も辛そうな素振りも見せずに

ただ黙々と捕獲用の巨大カゴの上げ下げと箱詰め作業を繰り返している。

（本当に一生懸命だなあ・・・

はは、これじゃ泣きごとばかり言ってるのも年長者として恥ずかしいな）

よしっ！となけなしのプライドを変換した気合いを入れなおす智春の横っ面を

船側に叩きつけられ跳ねあがった波頭が思い切り殴りつけた。

よく見知った少女から今しがた手渡されたソレをまじまじと眺め、
ルードルフ・オイスタツハはしかした一言「アスタルテ・・・？」
と

彼女の名を唱えることしかできないでいた。

6月のある日曜の昼下がり、オイスタツハの寝泊まりしているロタリングア系の廃寺院の庭先。

人の手を離れ自然の状態に還りつつある草花の絨毯を足元に、

常のメイド装束に身を包んだ彼女は訪ねて早々無言のまま

「んっ……」とちよつとだけ視線外して

照れくさそうに小さな自分の手から大きな彼の手へとそれを届けた。

右手に握り込まされた装飾品 ひかりいろ 陽光色をした十字架を

オイスタツハは数秒見つめて。

「アスタルテ、これはどういう……」

「6月第3日曜日」

「？今日の日付だな。それが何か関係……」

「お父さん、ありがとう」

瞬間、オイスタツハの時間は止まった。止まらざるをえなかった。

「私をこの世界に創り出してくれて」

自分に向けられた言葉をかろうじて機能している意識を全投入して
分析、解析、意味を理解して

「大切な人たちに出会うチャンスをくれて、本当にありがとう」

「う……うううう……」

自分でも柄でないと重々分かっていながら、

彼は瞳から零れる温かい感情の発露を止めることができなかった。

気付くと彼はうずくまって、随分と背丈の差があるはずのアスタル
テの顔が随分近くに見えた。

『あーあー泣いちゃってるね、いい大人がかわいいね』

ニューアンスだけは皮肉るように、しかしその実目許をつつすらと潤
ませながら言う操緒に

智春も羽々姫も何も言わず、ただ静かに彼女と同じ光景

ちよつとだけ変わった『親子』の在り様を建物の陰からこつそりと窺っていた。

「ホント、いいおっさんがマジ泣きすることか久しぶりに見たよ」

「あ、アスタルテちゃん頭撫でてあげてるよ！どっちが保護者なんだか・・・」

「で？あの子はプレゼントにあれ買ったとして・・・」

ついでに聞いとくけどあんた達は何が買ったの？報酬もらったんでしょ？」

羽々姫は聞くが、智春は軽く手をひらつかせ一言「あげた」とだけ。その答えは予測していたものだったらしく羽々姫も驚かない。

ただ「やっぱりね」と納得したように頷いただけだ。

「そうだよね」。お人好しの夏目のことだからそれくらいはすると思つてたよ」

さすが私の親友！と大げさに言つて羽々姫はじゃれるように智春の肩を叩いた。

苦笑する智春と操緒、そして薄く祝福の微笑をこの場の全員へと向ける羽々姫。

6月第3日曜日 父の日。

この日、ロタリングア職教師 ルードルフ・オイスタツハが手に入れたものが二つ。

決して許されるはずがないと思つていた自分を赦^{ゆる}してくれた、どこまでも優しい『娘』。

そして彼女（とその友人たち）の努力が形を変えた、黄金色の贈^{ギフト}り物。

Gift (後書き)

要望があれば各キャラのこの作品中での立ち位置など公開するかもです。

今回の話など特に分かりにくい関係性が多いのでもし何か気になる点などあればご質問ください。出来る限り対応するつもりです。

熱中夜

「ごろごろ。ごろごろごろ。」

「・・・」

みいーんみんなみんな・・・

「んうん、ああ・・・」

チリイーン・・・

「・・・眠れない」

ガバツ！と勢い任せに布団を跳ね上げたまま

少女は窓辺から流れてくる夏を彩る音色を口を一文字に結んだままじっと聞き入っている。

夜も更けているというのに元気に鳴き続けるセミの声と、ベランダにつるした風鈴の透明な音色。

季節の風情を感じさせるそれらもしかし今この時だけは現状を無慈悲に再認識させ彼女の安眠を妨げる効果しかない。

寝苦しさ目覚めてしまっからもう体感時間で30分ほど、ごろごろとベッドの上を転がったり体勢を変えたりして

なんとか再び眠りに落ちようとする彼女だったが室内に侵入した熱中夜の空気は

エアコンでも完全には駆逐できず、いたずらに一人の少女の睡眠時間を奪っていく。

「ふああ・・・眠気はあるんだけど眠れないよ・・・困ったなあ」
ベッドに腰かけ天井を仰ぐ彼女の口から欠伸がこぼれた。

幸い明日（時刻的には既に『今日』だが）は日曜日、普通に学生している彼女にとっては完全フリーで仮に一日中寝ていたとしても誰も咎めないが。

「あ、そうだ」

何かを思いついたらしい彼女は机の上に置いておいた携帯電話を取ると

慣れた手つきでボタンを押ししていく。指の動きからして恐らく誰かにメールでも打っているのだろう。それを証明するように「送信つ」と「の」の声に合わせ押されたボタンを最後に指の動きが止まる。

折れたたたんだ携帯を枕もとに置き十数秒、ウヴウヴ・・・と着信を知らせるように端末が細かく振動した。

安堵のようなすまないような微妙な表情でそれを取り、彼女は通話ボタンを押す。

『あ、もしもどうしたのこんな時間に？』

メール見たけど『暇だったら電話ほしい』って、

もしかしてこの暑さで寝付けないとか？』

『うん、だいたいそんな感じ。ごめん、寝てた？』

『ううん。私も少し前に起きたら汗がすごくてさー。お湯沸かしなおしてお風呂入ってたところ』

言われて耳を凝らせば確かに水音のような音が響いていた。

『タイミング悪くてごめん・・・』

『いいよ別に。私も暇だったのはおんなじだしね。で、朝までなに
して時間潰す？』

どうやら先方は既に徹夜を決定しているようだった。

日の出まであとおよそ4時間。

少女は通話料金設定を定額制のものにしておいて良かった、と変な所で安心した。

『そうだね・・・時間潰しの定番ならやっぱりしりとりとか？』

『別にいいけど二人でやるのってそれ多分虚しいよ。盛り上がりな
いし』

『ううんじゃあ・・・こ、恋話コイバナでも、す、する？』

『私はお兄ちゃん一筋です』

『10秒も持たずにコイバナ終わった?!』

一応提案こそしたものの、よく考えなくてもこのブラコンの友人ならこんなこと言うだろうことはとづくに分かっていた。

聞いたのは社交辞令みたいなものだ。特に意味はない。

「あ、あのね和葉ちゃん？一応聞くけどお兄さん以外で好きな人とかは・・・」

『LIKEでいいならいつぱいいるけど？』

それつまりLOVEの感情が向かう矛先は先の言葉通り義兄一本ということか。

なんともギャルゲーじみた恋愛をしている友人様であった。

「ははは・・・相変わらず和葉ちゃんの恋愛は難しそうだね」

もはや苦笑するしかない彼女が以前に何度か会ったことのある和葉の義兄 夏目智春の周りは

実際、なぜかやたら女性の存在密度が高い。

しかも幼馴染×幽霊、年上×サイボーグ、果ては巨乳×悪魔×巫女×ネコ耳という

属性の坩堝るつぼのような彼女様までいたりするのだ。

この状況下、義妹というただ一つのアイデンティティだけでエンディングまで到達できる可能性は果たしてあといかほどだろうか。

『難しいと言わないでよ・・・こっちは本気なんだからね、ななせ 凧沙ちゃん』

(ゾクッ！)

ポツリと付け加えられたセリフ、そこに込められた凄みに少女

あかつき 凧沙は一瞬、

笑顔のまま凍りついた。前々から承知していたことではあるが、この友人はこと自分の兄のこととなると少々以上に暴走が激しくて困る。

この春にそれまで通っていた中学から三雲学園の中等部へ転入してきたのが

その行動の最たるものだろう。新学期早々本人の口から語られた転

入理由は

『兄の下宿に同居することにしたから』だった。

そして実際、今彼女はほとんど転がり込む形で義兄の住む下宿、鳴桜邸で

毎日べつたりの生活を送っている・・・らしい。

噂に聞くだけで実際に凧沙もその眼で事実を確認したわけではなかった。

何度か遊びに来てよと誘われたりはしているものの

(和葉ちゃんのお兄さん・・・大丈夫、だよな?)

なまじ中途半端にその愛の深さを知っているだけ現実を見ることに躊躇いがあった。

普通に、何事もなく兄妹仲むつまじく生活しているならなんら問題はないだろう。

だが更にいくつかの情報筋によるとどうも鳴桜邸には

彼らの他にもあと数人、同居人がいるらしい。

嵩月奏、アニア・フォルチュナ、智春の射影体の水無神操緒、

そして和葉の射影体の咲華さいかの計4人。

その全員がそれぞれ方向性の違う要素の美少女で構成されているとなれば

事実を知っているモテない男子生徒あたりが

集団で夏目にリンチでもしかけてきそうな神様の優遇っぷりだ。

そんな同棲生活の最中に在ってどうも最近、和葉の中で新たに

ヤンデレ属性が目覚め掛けようとしているらしい。

友人としてなんとかそっち方面に成長するのだけは阻止したい凧沙だったが、

『凧沙ちゃん? さつきから喋ってないけどもしかして寝ちゃった?』

「あ、ううん、起きてる起きてる」

小さな声で問うてきた和葉に凧沙は内面の思考に向けていた意識を対話のそれへと戻す。

何か2、3言言葉を交わし合ったのは覚えているがその中身までは

覚えていない。

流れで変なことと言ってなければいいけど、と不安になった風沙へ

『じゃあそういうわけで！不肖苑宮和葉、そのみや

これより兄さんの部屋へ夜這いをしかけます！』

「へっ！？あつ！？ええ！？！？」

・・・会話は思ったよりとんでもない方向にぶっ飛んでしまっていたようだった・・・

『うう・・・ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

・・・』

電話口から読経のように流れてくる少女の声は聞いているだけで陰鬱になりそうだった。

騒ぎ過ぎたおかげでなんとか事前に同居人たちに捕らえられたらしい和葉は

現在絶賛猛省中とのこと。彼女のさっきの『夜這い』発言云々は夜中のおかしなテンションがそうさせただけ、事故みたいなもの・・・

風沙はとりあえず親友としてそう思うことにしておいた。

「あの・・・夏目先輩？いま和葉ちゃんどんな感じですか？」

『両腕荒縄で背中縛られた状態で洗濯板の上に正座させられて膝に広辞苑3冊乗せられてる』

義妹の電話でそう告げる智春の声に怒りの色はない。ただ疲労感だけがそこにはあった。

「あの、それって思いつきごうも・・・」

『あー、おいアニアさすがにそれはストップで・・・屋根吹っ飛んだら修理が大変だ』

「屋根が吹き飛ぶ！？いたい何する気で・・・」

「はいはい嵩月も気持ち分かるけどそんな物騒なもの振り回すのはやめような」

「焰月えんげつ！？まさか焰月振り回してるんじゃないですよね！？」

「H A H A H A！」と笑って何かをごまかそうとする智春。その背後で突然

ガツシヤアアアアンンンン！！！！！！！！！！

「うわっ！？」

硬質の何か　恐らくはガラスあたりだろう　が割れる甲高い音が響いた。

「今度はなんですか！？」と凧沙が聞き直す前に

「ハツハツハツ！助けに来たぜ、盟友！」

また新しい声。智春のものとは明らかに違うその声に凧沙は聞き覚えはなかったが。

「おまつ・・・鳳島！？なんでお前がうちにつ！？」

驚きと怒りを滲ませた智春の言葉が侵入者の名を告げた。

やはり凧沙には聞き覚えのない名前だった。

「なんでって夏目、盟友からのS O Sがあったからすつとんできたんだよ」

「だからその盟友って・・・ああこの状況だとお前しかいないな・・・」

舌打ちの音。縛られて動けない義妹を睨む智春の姿は想像だけで凧沙の背筋を冷たくした。

「そうさ！俺たち『シスコン・ブラコン同盟』の原則は助け合い！困っている仲間からの要請があれば勉強だろうが家事だろうが

たとえば戦争だろうが全力で協力するぜ！」

「なにドヤ顔で最低なこと言ってんだこのシスコンがああああ！！！」

！！！！」

「ぬべあばあああ！？！？！？！？！？」

「・・・」

ポチ

断末魔を最後まで聞き届けることなく携帯の電源を切ると、

凧沙は自分のベットに戻り布団に入る。夜明けはまだ遠い。

これだけ精神的に疲れればぐっすり眠れるだろうと、凧沙は固く目を閉じた。

設定（アスラクライン・人物編1）（前書き）

原作からの改変要素などをメインに書いています。
後々の展開で修正することもあるかもですが・・・

設定（アスラクライン・人物編1）

夏目 智春

三雲学園高等部1年 所属部活動：科学部

不幸体質兼主人公属性持ちでいろいろ厄介な目に遭うことも多い苦
労人。

基本的に常識人だが原作より怒りの沸点が低いのか
結構ぶちキレて鉄拳制裁を行うことも多い。

下宿先の鳴桜邸では5人の美少女（ただし正確に難アリなのが多い）
に囲まれ絶賛ハーレム中。

能力的には原作14巻ラストとほぼ同じ状態で、奏とも契約済みの
アスラクライン
魔神相剋者

水無神 操緒

三雲学園高等部1年 所属部活動：科学部

智春の幼馴染で機巧魔神“クロガネ？鐵”の射影体。

プラグインの影響で一部除いて誰の目にも見える状態にあり、
詳しく事情を知らない生徒などからは幽霊と認識されている。

智春が暴走気味なので代わりにツッコミ担当になることも多い。
機巧魔神使用中は原作同様姿を消すが、

幻書など外部から魔力の供給を受け稼働する場合は魂を消耗しない

嵩月 奏

三雲学園高等部1年 所属部活動：科学部

智春と契約した悪魔で現在鳴桜邸で同棲中。

同居人の中では一番生活力・家事力があり
しかも使い魔ドウターまでこさえた為、

主に和葉から強烈な羨望と嫉妬の情を受けている。

周囲曰く智春の正妻

SS トライアングルときめきHeart2

操緒「トモ、さっきから何やってるの？」

智春「見て分かるだろ、ゲームだよゲーム。なんかこの間

シユラウド部に遊びに行ったら沙々羅先輩に渡されてさ。

オリジナルでゲーム作ってみたからちょっとモニターして意見くれないか、って誘われた」

操「へえ、確かにあの人筋金入りのゲーマーだけど自分で作ったりもできるんだ。

それって結構カッコイイかも」

智「なんか今度うちの部長と新しくゲーム部創ろうかって話になってるんだと。

それで創部に必要な書類に記入する内容が欲しいからゲーム作って売って、

それを実績ってことにするらしいよ。ちなみにこのゲーム、プログラムとか組んだのはほとんど？部長だって」

操「マジで？そんなことする暇があったら自分の部活にちゃんと出てくださいって話だよな」

智「ほんとにな」

操「それでそれで？そのゲームってジャンルは何？RPG？アクション？

それともシューティングとか？」

智「いや、恋愛シミュレーション」

操「れ、れんあ・・・？」

智「もつとぶつちやけるとギャルゲー」

操「ちよ、ちよっとトモ！なに真昼間から真顔でプレイしてるのよ？！」

少しは羞恥心ってのがないの？！」

智「いやそこまで慌てる必要あると思うか？冷静に考えてもみるよ・

・ “あの”？部長と“あの”沙々羅先輩が作ったゲームだぞ？絶対まともな感性のヒロインなんて出てくるわけがない！」

操「そ、そう言われれば確かに・・・で、でも少しは恥じらいをもつてプレイしたって・・・！」

智「操緒・・・じゃあこれ見てみな」

操「え？えつとこの画面は・・・あれっ？うちの学校の図書室？」

智「このゲーム、舞台は三雲学園、攻略ヒロインの内面は

・ 実在の生徒とか関係者をモデルにしてるみたいなんだけど・

・ ほら、そんなことよりここ読んでみる。

図書室好きのミスティアス系ヒロイン、北星きたほしさんのセリフ

操「えつとどれどれ・・・」

北星「なんでなんでなのよ！なんであんな唐突に出やがったクソ女がオーグストといい雰囲気になってるのよ冗談じゃないわ！ダイアーが死んでのうのうと結婚しやがるなんて本当に信じられない！ああああ腹が立つ腹が立つ腹が立つ！！こうなったら作者××××して××のうえ××を・・・」

操「・・・えつと、なに、このめちゃくちゃ怖いシーン」

智「主人公がいつものように図書室に行くとなぜだか不機嫌そうにしていたヒロインに

『理由を聞く』って選択肢を選ぶと出てくるセリフ

操「いやシーン自体の説明じゃなくて」

智「もつと具体的に言うと熱心に読んでいたBL小説で好きだったサブキャラが」

「いつの間にか結婚した、ってことに人格変わるくらいシヨツクを受けた場面だな」

操「それゲームのヒロインとしてはアリなのかな!？」

めちやくちや怖いよセリフもこのイベントCGも!

「目から血の涙流して本引き裂こうとするヒロインの絵なんて需要がないにも程があるよ!」

智「いわゆるヤンデレってやつじゃないのか」

操「病んでるよ本気で病んでるよこの娘!デレる隙すらなく病みまくりだよこの目は」

即精神病院に入院させたいくらい狂気っぷりだよ!

てか凄いねこのイラスト?!見てるだけでSAN値直葬し

そうなんだけど!？」

智「イラスト担当したのはアルマン先生だって」

操「意外な才能!？」

智「まああの人も女性運悪いからこういう女の『黒い』部分よく知ってるんじゃないか?」

操「それでもまだ女の人に惚れられるメンタリテイは凄いよね・・・」

「
智「根が単純そうだからな・・・で、このヒロインの北星さんだけど

部長曰くモデルにしたのはOGのポーラさんって話」

操「なんでよりによってあの人選んじやったの!？」

智「他にもヒロインはいるんだけど・・・『ファザコンのハーブ好き先輩』とか

「別れた元カレが謎の怪物にどこかへ連れ去られるお嬢様」
とか

「主人公にべた惚れだけどちよつと素直になれない

クールな片目隠し系生徒会長 (メインヒロイン)』とか」

操「選考基準が明らかにおかしい!そして最後のは部長の願望が丸

出し!』

智「なあ・・・このゲーム、売れると思うか?」

操『100パーセント無理』

智「同意」

その後、ゲームバランスなどの調整を重ねネット限定で発売されたギヤルゲー

「トライアングルときめきHeart2」は智春たちの予想を裏切りかなりの本数を売り上げたらしい。

ただその客のほとんどがディープ過ぎるユーザーで、割と正統派に近いメインヒロインはユーザーへの好感度ランキングでは

ぶつちぎりのワースト1位だったそうだ。

緊急速報！？このラノ2012（前書き）

今回の話は「このラノ2012」のネタバレを少し含みます。

もう読み終わった人、もしくは最初から読む気が無い人、

ネタバレしてもいい人だけご覧ください

・・・大した情報でもないですけどね！

緊急速報！？このラノ2012

青月以下次々と押しかけ嫁が集結しつつある智春の下宿 鳴桜邸の一室。

午前中に引つ張り出したコタツにそれぞれ足をもぐり込ませた少女たちは

何故か神妙そうな面持ちで時計を見つめている。

現在時刻は午後の5時40分を少し過ぎところ。すっかり暗くなつた窓の外を

ぼんやりと眺めていたフランベルジュはふと人の気配を感じ視線を窓とは反対側、

廊下に面した扉へと向けた。一拍遅れ同じように気配に気付いたらしい残り二人も

読んでいた雑誌や剥きかけのミカンから視線をそらす。

どたどたという忙しない足音が響くこと十数秒。

「ただいまっ！」

バンっ！と勢いよく開け放たれた扉の向こう、

苑宮和葉は乱れた制服にも頓着する間もなくオコタにスライディングで進入、

「ごめん！他の買い物もあつて遅くなりました！」

そのまま何故か無駄に上気したテンションにブレーキ掛けることなく土下座した。

当然コタツの天盤に自分からヘッドバッドをかますことになり

「ふなっ?!」と情けなく一鳴き、頭を上げた和葉の額はうっすらと赤みを帯びていた。

「ククツ。元気はいいが相変わらずおつむの方は少し足りないみてえだナ、カズハ？」

銀の拘束をキィキィと揺らし嗤うフラン。

その右隣にいた沙々羅も同調するように「うんうん」と頷きつつ

「今どき妹キャラで天然・・・というかアホの子キャラなんて星の数ほどいるはずなのに、

実際近所で体験するとびっくりするな・・・」

とか相変わらず訳の分からない脳内思考を垂れ流していた。

「和葉ちゃんお帰り。そしてお邪魔してます」

「あ、凧沙ちゃんも来てくれたんだ？」

「古城君や雪菜ちゃんの代わりだね。二人とも今日は予定があるからって」

「そうなんだ？まあ・・・今のところ『そっち』は

誰来てもらっても特に問題起こしそうな人はいないしね・・・」

「？問題って？」

確認の言葉にしかし凧沙は首をかしげた。

「そういえば今日ってなんの集まりなの？実はそれ聞くの忘れちゃって、

ただここにくれば分かるからって・・・」

「ああ、それはね・・・」

そこまで言っていて和葉は手に持っていたビニール袋をコタツの上に置いた。

一緒に買ってきたらしい食材の類は横に置いて、

一個だけ全く違う店名が印刷されたビニール袋へと手を伸ばすと

沙々羅は和葉に聞きもせずその中身を取り出した。そして意味深な笑みだけを浮かべて

「今回私らが集まった理由は・・・これだ」

それを全員の真ん中へと置いた。ブルーの表紙が印象的な、それは一冊の本だった。

文庫本ほどの厚さもないその表面に印刷されたタイトルを何かに挑むような声でフランが読み上げる。

「毎年恒例『このライトノベルがすごい！』2012年度版だ。

今日はこれで俺たちの知名度がどんなもんか、いっちょ勝負がてら見てみようってことだな」

ズコッ！

ものつすごいメタ発言に一昔前のマンガのノリでショックを受ける
凧沙。

「まあ現実的なこと言うと『サイハテ』はまだ文庫発売してないし、
ぶつちやけ入ってるわけないんだけどちょっと面白そうだったんで
ここまで付いてきた」

「ぶつちやけしないでくださいよ桜狩先輩！それにフランさんも！
ねえ和葉ちゃんどうしよう！私こんなメタ回担当なんて乗り切れる
気が……」

『和葉帰ったのかー？いるなら僕先に風呂入らせてもらうけど……』

「一緒に入ろうお兄ちゃん！！」

親友の声も聞かず、脱兎の勢いで和葉はその姿を一瞬で消した。立
ち上がる動作も走り去る動作も全く視認できなかった。相変わらず
兄へのスキンシップのためなら

人体の限界や物理法則すら超越してそんな義妹さまだった。

「か、和葉ちゃああん……」

2匹の美しい猛獣の前に一人残される形になった凧沙にもだが構わず
「まあ『アスクラ』は最終巻の出版が時期外だから対象外だし、
それなら無駄にショック受けさせる必要もないよな」

「ああ、ありや完全に気付いてなかったからナ。騒がれても面倒ダ。
……」

「実質『ストブラ』と『ダン書』の対決だしな。で、これって勝敗
はどう決めるんだ？」

「掲載・紹介されてるページ数が多い方が勝ちダ。キャラがランキ
ングとかに入ってたなら

その名前の数だけプラスだナ。絵師のランキングも同じ」

簡単に説明すると『作品』は掲載ページ数×1点、

『キャラ』・『絵師』はランキングで名前が一回出るたびに+1点
です。

「ククク・・・覚悟しろよナギサ？なんせこっちは今年アニメ化したうえ、

コミカライズ3つ展開中だからナ？もしかしたら上位独占もあるかもナア？」

「頑張れ風沙！おまえのだって重版大量にかかったんだからナ！」
・・・もう早くどうにかしてこの人たち。ここに来たことにもう後悔しかない風沙は

遠く風呂場から聞こえる義兄妹の騒ぎ合いを聞きながら思考の放棄を決定した。

「まったく、和葉のやつ急に風呂入ってくるから驚いたじゃないか・

」
頭にのせたタオルでごしごしと頭を吹きながら羞恥に火照った体を冷やすように

智春は自分の部屋へと向かう。気持ちよく入浴していたところに確信犯で進入してきた義妹をなだめるのにいらん労力を使ってしまった彼の心身は

風呂上がりだというのにリラックスのりの字もない。

せめて今日は早めに休んで・・・などと考えていた彼の視界の隅にふと何かがよぎった気がした。

ある扉の前、4分の1ほど開いたその隙間から覗いているのは力なく横たわった・・・

「！？お、おい大丈夫か！？」

室内の様子がよく見えた瞬間、智春はそこへともう飛び込んでいた。そこにいたのは彼もよく見知った二人の少女　　暁風沙とフランベルジュ。

だらしなく床に崩れ落ちた体勢の彼女たちは何やら虚空に向かってぶつぶつと口を動かし目の焦点もあっていない。

明らかに尋常じゃない。そう直感的に理解した彼の背後から

「待たせたな……って夏目？風呂入ってたんじゃないっけ？」

聞き覚えのある声に振り返るとそこにはなぜかパジャマ姿の沙々羅が立っていた。

ドアノブに手をかけたまま訝しむような目を向けてくる彼女は

そのまま視線をスライド、今しがた智春が見たばかりの二人の惨状に気付き

「……まさかここまでショック受けるとは正直予想外だった」

「ショック？なんかあつたんですかこの二人？」

独白のような呟きをだが智春は聞き逃さなかった。問い詰められた

沙々羅は2、3秒

「あ……」とか「うん……」唸っていたがやがて勘念したのか、

床に投げ出された一冊の本を指差して

「引き分け。しかも作品介绍両方1/4ページだけで

三雲学園（三雲）に所属する奴ら全体としても惨敗」

智春には全く意味が分からない言葉。それだけを告げると

彼女は疲れを吐き出すような長い溜息ひとつついて。

「……フランのとも終わっちゃったし、来年はうちと古城たちで頑張らねえとな……」

見えない何かに挑むような、僅かな決意を滲ませた声を空気にとかした。

イツゴロウさんの動物王国？（前書き）

（たしか）初！

オリキャラメイン&続きもの！

注）次の話がすぐ？とは限りません。

間に別の話を挟む可能性大ですので

それでもよろしければどうかご覧ください。

イツゴロウさんの動物王国？

「ん、始まったか・・・」

夕刻の到来をあと僅かに控えた午後4時過ぎ、

ソファに腰を下ろしたヒュー・アンソニー・デイスワード卿は

牧歌的なメロディを流し漏らすテレビ画面に向けて独り言のように
呟いた。

彼の膝の上では黒衣の少女が気持ちよさそうに寝息を立てている。

ヒューイは彼女を起こさぬよう細心の注意を払いながら手元のリモ
コンで少しだけ音量を上げた。

画面の向こうにいるのは一人の初老の男性。澄み渡った青空の下、
男性はマイクを片手にひきつったような笑顔を浮かべ続けている。

そんな彼の顔を隠すように画面下からフェードインしてきたタイト
ルは

『イツゴロウさんの動物王国』。毎年2回ほどのペースで放映され
ているこの特番は

その名の通りレポーター役の動物大好きイツゴロウさんが国内外、
とにかく様々な場所へロケに出向いてはその土地土地で

動物とスキンシップを図るといふ動物番組だ。

この番組が同種のそれと一線を画しているのはその迫力、

そしてイツゴロウさんの動物への過剰とも思える愛情表現^{スキンシップ}だった。

毎回のように動物と触れ合おうとするイツゴロウさん。

その動物愛はしかし傍目の視聴者から見れば危険だったり恐怖だっ
たりというものも少なくはない。

というか、ぶっちゃけそっちの比率の方が断然多い。

例えば半年前の放送では南米アマゾン川上流の密林で巨大な人食い
アナコンダに巻きつかれたり、

はたまたサファリパーク内を車から降りて走り回ったりと

かなり自由奔放な姿を全国のお茶の間に晒していた。

一歩間違えれば放送事故レベルの番組だがその過激さが受け平均視聴率は高いらしい。

『はい全国のみなさんお元気ですか？イツゴロウです』

視聴者へ手を振るイツゴロウさん。歳を感じさせる若干乾いた声音だが、

それがむしろ穏やかな印象を見る者へと与えている。

「この人も結構な歳だろうに、本当に元気だなあ」

くつろぎの姿勢のまま、ヒューイは皮肉るような笑みをこぼす。

画面の中のイツゴロウは雑談などしながらどこかの町中の道を行く。ヒューイもよく見慣れた道だ。

『さて今回お邪魔するのは 県××市にある学校、三雲学園です。

お便りによるとなんでもこの生徒さんたちには一風変わったペットを飼われている方が多いそうで、

珍獣好きとしてこれは是非見ておかなければと・・・』

自分で言っていて少し興奮してきたのか徐々に言葉に熱がこもっていくイツゴロウを眺め、

ヒューイは申し訳ないようないたたまれないような気持ちになってきた。

『こんにちは！イツゴロウの動物王国です。こちらの生徒さんでしようか？』

『えっなにこれ?!テレビ!?!』

マイクを向けられた少女は困惑の表情に興奮の朱色を注さし

「どどど、どつしよう・・・!」と目を瞬かせている。

突撃取材が必要最低限の人員にしか事態を伝えていないのだから当然の反応だ。

『はいなんだか可愛らしいお嬢さんですね。では最初はこの人に

ドンガラガシャーん！！

放物線を描いた軌道の先、電信柱の下にあったゴミ置き場にド派手な音をあげ激突した。

『い、イツゴロウさん！？』

悲鳴じみたスタッフの声をマイクが拾う。インタビューを受けていた女子生徒が

騒ぎながら全力疾走で逃げていく様子が画面の端に見切れている。

『あーまたやつちゃったかー……ったくこのクソ狸！なんでもんたはそんなムダに元気なのよ！』

クウウン……

哀しそうな鳴き声を上げる動物の首に巻きつけられたリードを力任せに手繰り寄せながら

一人の女性がカメラに収まる位置までやってくる。

彼女に首根っこを押さえつけられた動物はしばらくじたばた暴れていたが、

やがて興奮も収まってきたらしく落ち着きを取り戻してきた。

溜息をつく女性にスタッフの一人が戦々恐々「あ、あの〜」と控え目に話しかけた。

『あん？なによあんたら？』

ぶつきらぼうに返す女性の声には明らかに陰があったが、

今しがた起こったこと(……)をしっかりと確認していたスタッフは

話しかけないわけにはいかなかった。

『突然すいません、私ら今ちょっとテレビ番組の収録やってたんですけど……』

あの、失礼ですがそちらのワンちゃんはあなたのペットですよね？』

『ワンちゃん？ああこの子のことが……まあペットと言えば言えないこともないかもね。』

正確には飼い主は旦那だけだ』

『その〜大変申し訳ないんですが……轆ひきましたよね？』

『へっ?』

端的な言葉でされた質問に女性は首を傾げた。

『いやですからその、なんというか・・・』

俯き、言いつらそうに言葉を濁すスタッフだったが、遂に意を決したように顔を上げて

『ですからその、おたくのワンちゃんのタックルでうちのレポーターが吹っ飛んだんだ・・・』

『おおよしよしー！元気いっぱいですねー君はー！』

『ってイツゴロウさん!?なんで早速元気にワンちゃんと触れ合ってるんですか!?!』

スタッフの絶叫がスピーカーを震わせた。つい数秒前までゴミ捨て場に頭から激突し

死にかけの虫のように手足を痙攣させていたはずのイツゴロウ。それがいつの間にか満面の笑みで平然としていたら誰だって驚き叫ぶ。

しかもその両腕の中に間違いなく加害者だろう大型犬(?)を抱いていればなおのこと。

『ん?どうかしたのかい君?』

スキンシップを妨害されたことに頬を膨らませるイツゴロウ。

『どうかしたのかい?じゃないですよ!だ、大丈夫なんですか体は!?!』

なんかすごい衝突音してた記憶があるんですけど!?!

それこそトラックが正面からぶつかったみたいな!』

跳ね飛ばされた時に一回、地面に衝突するときにもう一回、

背筋も凍りつく重低音衝突音が聞こえたのは気のせいだったのだろうか?

『はっはっは。若いくせに君は心配性だねえ』

朗らかに笑うイツゴロウ。その腕に抱かれたままの犬(?)は

見知らぬ人間に触られているのが気に障ったのかまた興奮してきた
ように毛を逆立て、

しだいにバリバリと放電まではじめて・・・

『って放電！？なんなんですかこの動物マジで犬ですか？

犬ってこんなバリバリ雷みたいな音する生き物でしたか！？！』

ツツコミに大忙しのスタツフだったが、しかしイツゴロウは全身に
流れる

数十万ボルトは下らないだろう電撃にも笑みを崩さず

『ふふふ、本当にかわいいワンちゃんですなー』

黒こげになっていく己の体にもまったく気付いていないように

ベタベタと毛並みを撫でまわし続けてる老レポーターの姿に

スタツフ一同は戦慄にも似た感情を抱かずにはいられなかった・・・

<続>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6708w/>

三雲学園物語

2011年12月1日00時55分発行